第23回 全国高校生「創作コンテスト」 作 品 集



令和元年12月1日 表彰式 於 國學院大學

國學院大學 高校生新聞社

学長 針本 正行

は、大変貴重なものであるとともに日本語の潜在能力の偉大さを感じさせるものです。 の言葉を使って自己表現への想いを日本文学の様式に組み込んでいこうとする高校生の皆さんの努力 なく日本人全体に拡がる活字離れが顕著になり、書籍が売れにくい現代ではありますが、 表現への志向性の高さを改めて示したものと、驚くとともに大変嬉しく思います。既に若者ばかりでは 短編小説、詩、短歌、俳句というジャンルに実に多くの応募がありましたことは、 日本語による創作 しかし、自ら

教えられることでもないかもしれません。それはつまり、自ら習い覚えたはずの日本語を、自分自身を としての創作表現作品になっていると思います。 に逆らえないということです。そこに誠実に向き合ったことが皆さんの貴重な経験であり、努力の結果 う考えが成り立たないということを意味しています。表現の動機の起源は不明ですが、自分の表現欲求 表現するのに便利な道具、皆に共通な同じ働きをする記号として自由に使用する、使用できるはずとい かと思います。創作表現という行為は、実は意識的に、意図的に行えることではないかもしれませんし、 ところで、創作表現という行為については、特に高校での学修ではあまり注目されない分野ではない

繋がっているということを自覚して、さらに自分の言葉を磨き上げていただきたいと思います。 どうか皆さんが作品を創り上げる行為が、これまでの日本文学の作者たちが味わった創作への想いと

									現代詩の部									短篇小説の部	巻頭言
入選	入選	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	優秀賞	優秀賞	最優秀賞	選評	入選作品	佳作	佳作	佳作	佳作	佳作	優秀賞	優秀賞	
『足踏みオルガン』東京・女子学院高等学校	『夜明け』福岡県立明善高等学校	『かわいい』岡山・岡山学芸館高等学校	『幽霊』東京・田園調布雙葉高等学校	『金曜日』東京都立日比谷高等学校	『感情の詰まったペットボトル』神奈川県立麻生高等学校	『もの思い』群馬・高崎商科大学附属高等学校	『立ち止まって、一歩』埼玉・淑徳与野高等学校	『タイムリミット』北海道・立命館慶祥高等学校	『僕と乳房』兵庫・神戸大学附属中等教育学校	作		『遊離魂』東京・巣鴨高等学校	『機械仕掛けのヒーロー道』神奈川県立横須賀高等学校	『ぐりーんあっぷる』東京・安田学園高等学校	『灰色の屋上』福岡県立筑紫丘高等学校	『籠城の演目』宮崎県立宮崎東高等学校	『神のみぞ知る』東京・東京純心女子高等学校	『魂の怨嗟』東京・文化学園大学杉並高等学校	
二年	二年	二年	二年	年	二年	年	二年	二年	四 年	家	:	年	二年	二年	年	三年	二年	二年	学 長
菊地 愛佳	川口るみ	川上 紗和	本領 里緒	浜口 すず	安田 武流	小板橋彩花	内藤 結月	村上 陽香	吉田 眞子	井上 孝雄		溝上 大翔	水田里緒菜	瀧口 夏鈴	吉田恵	比江島 凜	柏倉美彩子	登 裕太郎	針本 正行
33	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	: 23	20	16	13	10	7	4	1	

後記	第二十三日	第二十三日		俳句		短歌									
	第二十三回全国高校生「創作コンテスト」応募総数…	第二十三回全国高校生「創作コンテスト」受賞者一覧・	選評	最優秀賞・優秀賞・佳作・入選作品・	選評	最優秀賞・優秀賞・佳作・入選作品・	選評	入選『息を 吸う』	入選『花火』	入選『太陽の裏』	入選··········『SET sail』·········	入選『みじん切り』	入選『銀』	入選『家族』	入選『溺れる季節』
		覧			歌		······································	埼玉県立浦和第一女子高等学校	千葉・渋谷教育学園幕張高等学校	東京・国際基督教大学高等学校		福岡県立明善高等学校	東京‧桐朋高等学校	埼玉県立春日部東高等学校	沖縄·N高等学校 沖縄伊計本校
			人		人		人	三年	二年	二年	三年	二年	年	二年	三年
			堀本		田中		水無田	梶原	伊藤	牧野	栫	牛島	小 俣	関口	島川
			裕樹		章義		田気流	翠.	寛子	牧野かれん	伸太郎	伸陽	卓紀	凌真	亜弓
: 47	: 46	: 45	44	: 42	41	: 39	38	37	37	36	36	35	35	34	34

短篇小説の部

優秀賞

魂の怨嗟

東京・文化学園大学杉並高等学校 二年

室 裕太郎

間が に処せられ没した、此の浮世に其の名を馳せ、竹帛に垂らす事と成った 罰と云う小説の題名である。善ではなければ悪、悪でなければ善の様に、 罪のantithesisとは何ぞや?其の解は善なのか?否、 の垣根を巡らせるのは無理な話である。然う云う言葉は詮ずる処 なる善人でも時には魔が差し、 事に忍びなかったのか、銭への夥しき執念が逆巻き、罪に手を染めて衊 に依り行った為か、或いは、たゞ貧乏神に纏わり憑かれて苦汁を嘗める ある。博奕や花柳での酒色に溺れる為か、其れかもしくは暴戻な親の命 の難問を掲げる度、 た牽強附会に過ぎぬのだ。諸君等に問おう。善のantithesisが悪ならば、 れるのを潔しとして了ったのであろう。勧善懲悪とは良く云うが、 かの侠盗・鼠小僧次郎吉とか。 為永春水著述せし春色梅児誉美の書が発兌されたと同じ天保三年に獄門 多なる土匪や御尋ね者等に溢れ、江戸で傍若無人に悪を働いた。例えば、 幕府の老中、 『罪悪』の不条理と逆説に翻弄されたが故に生み出した、 唐津松軒公が国の政を為していた天保の時代。 思い浮かべるは俄羅斯のFedor Dostoevskeyの罪と 如何なる悪党でも良心が在るので、 鬼に角偸盗を犯す者がうよく一居た訳で 違うであろう。 巷にゃ数 莫迦げ 正邪 如何

ているとするならば、一体如何云う定義であろうか。さっぱり判らぬ。ある。何かゞ可笑しい。もしも是を互いに反するものだと定義づけられ罪と罰はあまり腑に落ちぬ。罪でなければ罰である、罰でなければ罪で罪と罰をそれ (^ 肯定と否定に立て、反立していると合点がゆくのだが、命題をそれ (^ 有定と否定に立て、反立していると合点がゆくのだが、

平御免蒙ると、宗近は独り、心で嘆いた。其ンな救い様の無い不安を、 Stray dogsみたく、路傍で野垂れ死ぬ――其ンな憐れな末路は厭だ、真っ 宗近は常住坐臥、 悴していき、 て、夜な夜な猪口に酒を注いで自棄吞みする生活が祟り、徐々に枯稿憔 どが糊口を凌ぐ為、食い扶持に回して了う事に成り、 含めた多くのもの、物価が高騰しており、刀鍛冶を続ける為の資本の殆 屋で自炊に使う食材を買って家迄の帰り道を独り、侘しげに摺り足で歩 に飢凍する虞れがあると隔靴掻痒の感を覚えた。melancholyに罹患し き、ハァッとでかい溜め息を吐いた。国の財政の窮乏、飢饉を経て米を 或る日の逢魔ヶ時である。江戸の刀匠・伊原宗近が近所の青物屋、 其の容貌も次第に峭刻となり果てた。行き場の無い無様な 一刹那たりとも忘却出来なかったのである。 宗近は、 孰れ道塗 魚

受けていたらしい。
昔馴染みの朋友、緒方源三郎が立っていた。如何やら宗近の帰りを待ちと宗近を呼び止める声が響いた。宗近は腰を捻り後方を見ると其処には平生暮らしている長屋に着き、宗近が戸を開けようとした処に、「待て」

寝床迄与えたと云う。此の慈しみ深い行為は瞬く間に善き話として町中あったらしい。店の書物を売った金銭を恵んだ上、流氓の腹鼓を打たせ郎は、飢渇に藻掻き苦しんでいる見ず知らずの流氓に情けを掛けた事が郎は、飢渇に藻掻き苦しんでいる見ず知らずの流氓に情けを掛けた事がぶ。不昧で愛想が良く、博識治聞である。民草の羨望を一身に浴している。呼ばは町で書肆を営んでおり、宗近とは、竹馬の友の縁で結ばれて

に膾炙し、源三郎は周囲から慕われる様になったのである。

して誇らしく思っていた。然う思っていた筈であった―― 宗近は八面玲瓏の性格を持ち、善行を働く源三郎には脱帽し、友人と

「おゝ、源三郎ではないか。如何した?」

「……おれ、人を殺しちまった」

実に唐突であった。宗近は喫驚した。友人が口にする科白なのかと疑っ

た。

語った。
「何故だ」と答えて、暫くすると見せた事のない憂わしい顔つきで次の様にらぬ」と答えて、暫くすると見せた事のない憂わしい顔つきで次の様に「何故だ」と訊いた。源三郎は此の問いに対し、首を横に振り、たゞ「解重苦しい空気に圧し潰されそうになった宗近は、周章狼狽せず冷静に

人生が厭にもなったのだ……生き地獄だったのだ」はおれが憎くて仕方がなかった。而して高利貸しにへこく〜頭を下げるせてやれない。兄として面目ない。兄としての務めを果たせられぬおれ「おれは疲れたのだ。碌に稼げず、九つ下の幼気な弟に飯も碌に食わ

眺めていた。壁の染みでも見てるかの様な、朧げな目だった。源三郎は斯くの如く愚痴を零しつ、、没せんとする落陽をぼんやりと

「お前……其の高利貸しを殺したのか」

「左様だ」

憐愍の情で胸が一杯になった。目を睜らせた儘だった。己の罪について分疏しない姿勢に宗近は感服し、目を睜らせた儘だった。己の罪について分疏しない姿勢に宗近は感服し、源三郎が人殺しを犯したなぞ俄には信じられぬ。 宗近は未だに震駭し

した。宗近は其れを目にして思わず唾を呑み込んだ。 すると、源三郎は長襦袢の懐から何枚かの赫灼たる保字小判を取り出

「盗ったのか?」

.....うむ」

『罪を重ねる心算か。お前御奉行にしょっぴかれたら其れこそ本末転

倒だぞ。弟を独り世間を渡らせるのだぞ。惨い事をする……

わせて語る。が流れ、手には多くの小判の入った袋と、斧があった。」と彼は指を顫羅刹がおれの中から出て来たのだ。我に返れば、畳には夥しい程の鮮血「おれは人を殺める時、おれはおれではなくなった。心の檻に鎖した

噫々、おれは人の道を踏み外した――

振り下ろされし斧の刃が人の前頭葉を無情に叩き割ったあの時も然り

を手に取ったあの時も然り―― 返り血を浴びた薄汚い両手が無意識のうちに人の抽屉に仕舞った小判

に、絶望と罪悪の見えざる呵責を受け、がくっと首を下ろした。源三郎は自嘲の言葉を悉く吐き出して、神や仏から見離されたかの様

になって悟った。

に秘めた猛獣が理性を保てず、本能の隨に生きた者の末路である――に秘めた猛獣が理性を保てず、本能の隨に生きた者の末路である――の解脱と名目をつけた殺人と略奪を選んで了ったのではなく、単純の解脱と名目をつけた殺人と略奪を選んで了ったのである。是ぞ人の内の解脱と名目をつけた殺人と略奪を選んで了ったのである。是ぞ人の内の解脱と名目をつけた殺人と略奪を選んで了ったのである。是ぞ人の内の解脱と名目をつけた殺人と略奪を選んで了ったのである。是ぞ人の内の解脱と名目をつけた殺人と略奪を選んで了ったのである。是ぞ人の内の解脱と名目をつけた殺人と略奪を選んで了ったのである。是ぞ人の内の解脱と名目をつけた殺人と略奪を選んで了ったのである。是ぞ人の内の解脱と名目をつけた殺人と略奪を選んで了ったのである。是ぞ人の内の解脱と名目をつけた殺人と略奪を選んで了ったのである。とぞ人の内の解脱と名目をつけた殺人と略奪を選んで了ったのである。とぞ人の内の解脱と名目をつけた殺人と略奪を選んで了ったのである。とぞ人の内に秘めた猛獣が理性を保てず、本能の隨に生きた者の末路である――に秘めた猛獣が理性を保てず、本能の隨に生きた者の末路である――にもいる事だ。ある。

の脳裏を、或る邪な考えがよぎった。此の時、人間の悪意についてあれこれ思いを巡らすうちに、ふと宗近

ば然うなのだ。 悪の念が湧き上がった。私はこんなに迄貧しさに苦しんでいても、 のに源三郎は軽々しく其れを行う。陋劣至極なり。よくくく考えてみれ 道理から背離したいとは雀の涙も思わなかった。思えなかったのだ。な が、私の苦労も知らずに裏切り、 は苛立ちを覚え、源三郎にも怒りの矛先を向けた。彼の堕落が赦せなかっ としての心を疑った。而して、無関心なのに、私は、恰も彼を心配して 舞われている事を、「知るか」としか思っていないのだ。私は己の人間 は愧赧し、 えれば不思議な感情だった。つくぐ〜呆れが礼に来る。そんな私に、 いるかの様に思われる言葉を吐いた。何たるironyであろう!今して考 に掛けたのだろうか。何故彼の悔恨を安々と呑み込んだのだろうか。 噫々……何故私は友に同情したのだろうか。何故偽善の言葉を源! 誇らしいと思えた己の中では至尊たる人格者だった筈の源三郎 唖然し、忿懣遣る方無い――本当は、 楽をして、罪を犯して財を得た事に憎 私は源三郎が不幸に見 掟や

失望したぞ。私は失望した―― 宗近は呟く。

いこ。まじく源三郎を睥睨した。是に源三郎は大層怖気づき、二、三歩後退りまじく源三郎を睥睨した。是に源三郎は大層怖気づき、二、三歩後退りな顔つきになり、瞋恙の焔が宿った双眸で、相手を呪い殺したそうに凄宗近は敵愾心の凡てを此の呟きに圧縮した。而して、餓狼の如き獰猛

「……如何した、宗近」

源三郎は怪訝な顔をした。

5の鋒、決して緩まなかった。の鋒を源三郎に向けた。源三郎は動揺し、「何の冗談だ」と怒鳴るものゝ、宗近は暗澹として懐中より一尺足らずの錆びたヒ首を取り出し、白銀

「盗った金を凡て一銭残らず寄越せ」と、宗近は皺枯れた低い声で云っ

た。

も知れん。おれは此の金であの子を救ってやりたいのだ」れ、宗近。おれには腹を空かせた儘の可愛い弟が居る。孰れ餓死するか「其の襤褸刀でおれを嚇して、金を奪おうと云う魂胆だな?解ってく

源三郎が持っていた袋の中に詰めた。掻き切った。而して宗近は倒れた彼の懐から小判を凡て掠め、せっせと掻き切った。而して宗近は倒れた彼の懐から小判を凡て掠め、せっせと源三郎が懇願すると、宗近は躊躇無く手にしているヒ首で彼の喉頸を

宗近は虫の息である源三郎に斯う云った。

其の場から足早に遁走し、雲隠れを果たした。金を持て。い込むな。其れはたゞの蒟蒻問答だ」と非情な捨て科白を吐いて宗近はおれの為に罪を犯す事も当然仕方無いよな。お前だけ惆悵していると思「お前が弟の為に罪を犯す事は仕方無いって云うんだったら、おれが

此の二人の諍いは誰も知らない。

小

優秀賞

神のみぞ知る

東京・東京純心女子高等学校 二年

怕倉 美彩子

な、と焦って母に電話をかけた。を入れると、母からの着信履歴がずらりと表示された。何かあったのかを入れると、母からの着信履歴がずらりと表示された。何かあったのか事の発端は私のせいかもしれない。部活帰りにスマートフォンの電源

「ああ、もしもし?今帰るところ?」

「うん。何かあったの?着信がたくさん来てたけど・・・。」

「由佳をどこかで見なかった?五時をとっくに過ぎてるのに帰って来な

いのよ。」

で、家の近所を駆け回っているが、門限である五時を破ったことはなかっで、家の近所を駆け回っているが、門限である五時を破ったことはなかった、の春小学二年生になったばかりだ。外遊びが好き

なかったの?」「私、自転車で学校来てるから由佳を探してみる!学校とか公園にもい

まれてないと良いんだけど・・・。私は由佳を探すべく、自転車のペダ通話を切って時刻を見ると五時半を過ぎている。何かの事件に巻き込「そうなのよ、私も車で近所を回ってみるわ。奈帆も気をつけてね。」

へ行ってみたものの、誰もいなかった。夕焼け空が私の不安を煽り始め―――いない。どこにもいない。小学生が集まって遊びそうなところ

ルを踏み込んだ。

こうと意を決した時だった。橋の下に見知ったランドセルが見えた。た。隣町へ行ったのかもしれない。川を挟んだ隣町の方を見つめて、行

「由佳あ!!」

思わず自転車を乗り捨てて、欄干にしがみつく。

「あ!お姉ちゃん!」

をしとるんじゃあ!半ば呆れて母に電話をかけた。を流していたようだ。きちんとパレットまで使って色を混ぜている。何の絵の具まみれの手と服はどうしたんだ。どうやら由佳は、川に絵の具由佳は真剣な面構えで川の中に入って何かをしていた。いやいや、そ

おこ。教をされた妹は、泣き跡が残る頬を膝にうずめて、ソファで小さくなっ 嵐のような勢いで妹は母に家へと連れ戻された。母からみっちりと説 のような母の一喝を食らうと妹は声を上げて泣き始めてしまった。 電場

「なんであんなところにいたの?絵の具も無駄遣いして。」

「・・・だって、神様をびっくりさせたかったんだもん!

ち着いた妹によると、こういうことだった。る。神様をびっくりさせるってどういうことなんだ?暫くしてやっと落妹はまたしても声を上げ泣き始めた。母も私もカミサマ?と首を傾げ

昨日の夜、私と由佳は暇を持て余していた。

「何かおもしろい遊びしようよー。」

「んー?おもしろい遊び?」

私は考えを巡らすと、なかなか良い案を思いついた。

「百人一首で坊主めくりしようか!」

「ぼうずめくり?」

を覚えられるかもしれないな。百人一首の札を切って、二人の間に置いたまたま最近学校で和歌の勉強をしているところだし、遊びながら歌

た。ルールを簡単に説明してゆるりと坊主めくりを始めた。

「見て!お姉ちゃん!せみまるだって!この人。変な名前だねー。」

「昔の人は名前に動物の名前を入れると良いとされていたらしいよ。

「だれそれー?」

んー例えば蘇我入鹿とかね。_

由佳はごろりと寝っころがって、首を傾げている。

「多分、六年生になったら先生に教わると思うよ。」

じゃあ次は私の番、と私は札をめくった。

「どう?ねえ、ぼうずだったー?」

「残念!在原業平でした!」

千早ぶる 神代もきかず 龍田川

からくれなゐに 水くくるとは

と示された札を由佳に見せた。

「ちはやぶる?これ、どういう意味?」

えーと確か授業だと・・・。

「さまざまな不思議なことが起こっていたという神代の昔でさえ、こん

をしぼり染めにしているとは。とかこんな感じの意味だったと思う。」なこと聞いたことがない。龍田川に一面紅葉が浮き、真っ赤な紅色に水

ちらりと由佳を見ると、身を起こして目を大きく見開いていた。そん

なにおもしろかったかな?

「かみよって何?紅葉がすごく赤かったからびっくりしたってこと?川

が赤くなったら、神様もびっくりするんだね!」

みたい。大分この和歌を気に入ったご様子。由佳は早口で問いた。目をキラキラさせて、どうやら川を想像してる

「神代っていうのは、ずーと昔の神様たちの時代のこと。由佳が言った

「そっかー!由佳も神様びっくりさせたいなー」とおりで、紅色に染まった川が綺麗だったんだろうね。」

なったら、いっぱい驚かしてあげな。」「神様は空の上の方で何でも見てくれてるよ。由佳がこれから大きく

由佳はそれは存れは嬉々としていた。そして、翌日由佳は学校が終わしまっていた。

アイディアね!きっと神様も喜んでくれたと思うわ。」「由佳ったら!おもしろい子ね。神様を驚かそうとするなんて、素敵な

母は由佳の頭を優しくなでた。

もんな。由佳は良いお姉ちゃんを持ったねー。」「奈帆がたくさんのことを教えてくれて良かったわね。奈帆は物知りだ

「うん!お姉ちゃんありがとう!」

思った。結果、由佳にケガもなく終わったから良かったけど。私は照れ笑いをしながら、もしやこの一件は私が発端かもしれないと

「そうだ、由佳。本物の龍田川へ行ってみない?確か奈良県の龍田山の

「えー!行きたい!!」

ほとりの川で、秋は紅葉の観光名所なのよ。」

「奈帆はどうかしら?行ってみない?」

「うん。本当のところに行って紅葉を見てみたいな。」

神様から由佳へのご褒美かもしれない。神様って本当に私たちを見ていいった様子だ。世の中何が起こるかなんて分からないな。もしかしたら、でかしたぞ!という意を込めて由佳の頭をなでると、どうやらご満悦と行だ。由佳の突発的な思いつきが思いの外良いことを運んできてくれた。じゃあ決まりね、と母は父へメールを打ち始めた。今年の秋は奈良旅

籠城の演目

宮崎県立宮崎東高等学校 三年

比江島 凜

- 100。 千ある座席はほとんど埋まり、その様子から五月亭の人気ぶりがうかが 下手からそっと客席を覗くと、そこにはたくさんのじゃがいもがいた。

「そんなことしない方がいいよ、小蝶」

では最年長のベテランだった。今年で七十七になる師匠は五月亭秋楽という芸名で、存命の五月亭の中歩り返ると、そこには濃い緑色の着物に身を包んだ師匠の姿があった。

「そんなの見ても緊張するだけだ」

の楽屋は狭く、今は師匠とわたししかいなかった。わたしは、そうですね、と暖簾から離れると、楽屋へ戻った。四畳半

がら、そういえば、と口を開いた。そわしていた。そんなわたしに向かって、師匠が白髪を左に撫でつけな落語をするのだ。緊張していないわけがなく、気もそぞろでずっとそわら日はわたしの初高座だった。五月亭一門の前座として舞台に上がり、

「小蝶はどうして落語家になろうと思ったんだい?」

師匠の質問でわたしの心の中の古い扉が開く音がした。きょとんとし

わたしが落語家になった理由。

た顔の師匠を横目に、わたしは思い出の海に浸る。

あれは五年前のことだ。

のことは音い見でしょうだかと記しているがで、だれば見るのではいいによいにはあったものの、お母さんにまた嘘をついてしまったという罪悪感から、下ではあっため、エレベーターに乗った。買いたいものを買えた充実感情に下りるため、エレベーターに乗った。買いたいものを買えた充実感情に下りるため、エレベーターに乗った。買いたいものを買えた充実感情に下りるため、エレベーターに乗った。買いたいものを買えた充実感情に下りるため、エレベーターに乗った。買いたいた。場合では大きと呼べる知に行くと言ったが、当時高校三年生で十八歳のわたしは友達と買い物わたしはその日、街中のデパートにいた。お母さんには友達と買い物わたしはその日、街中のデパートにいた。お母さんには友達と買い物

ベーターが動き出した。わたしは暗い顔で一階のボタンを押した。やがて、ドアが閉まり、エレわたしは暗い顔で一階のボタンを押した。やがて、ドアが閉まり、エレはあったものの、お母さんにまた嘘をついてしまったという罪悪感から、

床に転がった。しばらくの沈黙のあと、気づく。わたしは思わず尻餅をつき、持っていた紙袋が音を立てて破れ、やがて、次の瞬間、ゴトッと大きな音がして、遅れて体が揺れた。立っていた

エレベーターが止まったのだ。

「大丈夫ですか」

たし以外にも乗客がいたということにはじめて気づいた。た。髪の毛と髭には白髪が交じっていて、でも、それがよく似合っていた。髪の毛と髭には白髪が交じっていて、でも、それがよく似合ってい突然低い声がして驚いて振り返ると、そこにはスーツ姿の男の人がい

「大丈夫です」

理そうだった。

で、中の洋服は無事だが、破れた紙袋のせいでもう持って歩くことは無た。中の洋服は無事だが、破れた紙袋のせいでもう持って歩くことは無わたしは立ち上がって社交辞令を返すと、床に落ちている紙袋に触れ

その後、猿渡さんが救急隊員に状況を伝え、わたしたちは床に座った。

気にしていると、あの、と声がした。開いたが、圏外で使えなかった。わたしが手持ち無沙汰で紙袋の様子をエレベーターが動くまで一時間はかかると言われた。スマートフォンを

「私、猿渡と言います」

「浦芝千里です」

つわたしがそう言うと、猿渡さんは、そうですか、と笑った。初対面の人にフルネームを教えたのはまずかったかな、と口を抑えつ

「これも何かの縁ですね」

縁。わたしは思わず暗い顔になって、猿渡さんから視線を外した。

「浦芝さんは学生さんですか。」

見えた。 んはまた笑った。その笑顔は若くも見えるけど、六十代後半くらいにも 猿渡さんの問いに、はい、と慌てて答えると、そうですか、と猿渡さ

「学校生活で悩んでるんですね」

もいたが、わたしはそれに応えることができなかった。子、あからさまに嫌な顔をする子、中には受け入れようとしてくれた子クラスメイトたちのことだった。暗くて何も言わないわたしを無視する猿渡さんの言葉に、わたしは再び、はい、と答えた。頭に浮かぶのは

「もしかして、彼氏さんのことですか」

なくなる神無月というのがあります。それで、出雲は大変なんです」が、あることがきっかけで別れた。それは、彼がわたしの学校での扱いが、あることがきっかけで別れた。それは、彼がわたしの学校での扱いが、あることがきっかけで別れた。それは、彼がわたしの学校での扱いが、あることがきっかけで別れた。それは、彼がわたしの学校での扱いが、とことがきっかけで別れた。それはよう学校の男子だったは、と声を出してから、慌てて口を抑える。おそるおそる猿渡さんをは、と声を出してから、慌てて口を抑える。おそるおそる猿渡さんを

猿渡さんは顔を左右に動かしながら話を続けた。しばらくして、これ「ご主人、どうです?儲かるでしょ。いや儲からねえんだよ、それが」話の急な展開に首を傾げていると、猿渡さんは、どうも、と言った。

は、と気づく。

これは、落語だ。

最後の下げが終わると、わたしは自然に手を叩いていた。そして、夢は見ていない、と言うと妻が隠し事を疑い……、という話だった。で、夢は見ていない、と言うと妻が隠し事を疑い……、という話だった。なっていく主人公の夢。やがて、大家に歯向かった主人公は裁判にかけなっていく主人公の夢。やがて、大家に歯向かった主人公は裁判にかけられ、天狗に会う。そのときには、わたしはもう夢中だった。最初は訝しんでそれ、どんな夢を見ていたのか、と聞かれる。主人公が何も思い出せなくれ、どんな夢を見ていたのか、と聞かれる。主人公が何も思い出せなくれ、どんな夢を見ていたのか、と聞かれる。寝ていた主人公が妻に起こさそれは「天狗裁き」という演目だった。寝ていた主人公が妻に起こさ

んな風に即興で落語を披露できるはずがない。だった。それを聞いたわたしは納得した。プロの落語家でなければ、ああとで分かったことだが、猿渡さんは五月亭五郎というプロの落語家

「すごいですね。面白かったです」

猿渡さんは、いやいや、と笑うと、手首に巻いた時計に目をやって言っ

た。

ことには、ことによる。まだ時間があるね。他にも何か聞きたい?」

わたしは目を輝かせて頷いた。

どれも秀逸だった。そう。わたしは落語に興味を持っていたのだ。最近の小説よりもずっとよくできていて、下げと呼ばれるオチの部分がわたしは猿渡さんの話術に感心しつつ、話自体にも興味を持っていた。その後、猿渡さんは「寝床」と「芝浜」という話を披露してくれた。

ていた。駆けつけた救急隊員をわたしが睨むとそれを見ていた猿渡さん「芝浜」の途中でエレベーターが動き出したとき、わたしはがっかりし

が優しい声で笑った。

「じゃあ、私はこれで」

「待ってください」

わたしは思わず言っていた。猿渡さんがわたしを振り向く。

「猿渡さん」わたしは続けた。「わたしを弟子にしてください!」

数日後、高校を卒業したわたしは五月亭一門に入門した。師匠の秋楽

さんをはじめ、五月亭の人たちは皆優しかった。

亡くなった。肺ガンだった。
そして、わたしが五月亭としての暮らしに慣れてきた頃、猿渡さんが

さんの最後の落語になった。エレベーターの中で猿渡さんがわたしに聞かせてくれた落語は、猿渡

はとても忙しく、正直なことを言うと、五郎さんの存在を忘れてしまっあれから五年が経ち、わたしは二十三歳で前座になった。その五年間

ていたくらいだった。わたしはなんて不義理なんだろうか。

小蝶、小蝶」

そう呼ばれて目を覚ます。遅れて、自分が眠っていたことに気づく。

「小蝶、大丈夫かい」

師匠の言葉で、はっと我に返る。

「師匠、前座は」

「大丈夫。まだ始まってないよ_

師匠の言葉にほっと胸を撫で下ろすと、早く来ててよかったね、と師

匠が笑った。

「ここがわたしの寝床です」

「何言ってるんだか」

師匠はわたしのボケを受け流すと、でも、と言った。

「そんなやついたかなあ」

「え?」

「五郎ってやつだよ。少なくとも、わたしは覚えてないんだが_

師匠の言葉に不安になる。猿渡さんが、いなかった?

「出番までもう少しあるけど、寝るかい?」

すると、出囃子の音が鳴り始めた。師匠が、時間間違えてた、と笑う。「いえ」わたしは懲りずに続けた。「また夢になるといけねえ」

わたしはそんな彼に笑顔を向けると、下手に立った。

歩を進めるたびに出囃子の音が大きくなり、やがて、拍手の音がわた

しを迎える。

え? わたしがどんな夢を見たかって?

それは秘密。

<u>^</u>

灰色の屋上

福岡県立筑紫丘高等学校 年

恵

これは、 加藤の不完全な孤独の物語である。

藤は座り込んだ。 場所に逃げ込んだ。散らばった赤い紅葉が、アスファルトにはりついて いる。時折はがれそうになる葉の、パリパリという音を聞きながら、 加藤は一人でいたかった。誰も信じることができなくて、人のいない

どれくらい時間が経ったかわからない。立ち上がると、はすむかいの

「君は、一人でいたいの。」

電柱の陰に一人の男が立っていた。

だとしたら依頼する訳にはいかない。しかし、もし、本当に一人でいら それには「孤独をお届けします。」と書かれていて、裏には電話番号が うつむいたまま小さくうなずくと、男は小さな紙を手渡し、立ち去った。 自分がどこかへ連れ去られるのか、それとも周りの人がいなくなるのか メモされていた。孤独をお届けするというのはどういう意味だろうか。

感じた時、すでに右手は携帯のダイヤルボタンを押していた。 乾いた音がした。葉が踏まれる音。 誰か来る。それが大きくなるのを

しく握った右手の影が短いのを見て、今が昼間なのだとわかった。周り 背中が少し痛い。目を開けると、そこは学校の屋上だった。携帯を弱々

> りそうな目で足元のあたりを見つめていると、そこには他人の影があっ つったっている避雷針。加藤にとっては、どれも灰色だった。今、きっ と孤独がお届けされたのだ。特に嬉しいとも悲しいとも思わず、 いる灰色の住宅街の景色と、色味の無い校庭の景色と、頼りなさそうに にはほとんど何も無い。あるものといえば、いつも校舎の三階から見て

「今どんな気分なの。」

そう聞いてきたのは例の男だった。

となら、ずっとここにいたいです。一人でいられるから。 「何もすることがありません。でも、 気分は悪くありません。できるこ

届けられない。君と心が通じる何かが現れる。それが何かは知らないけ 「そうか。ただし、一つ問題があってさ、君の望むような完全な孤独は

けようとして、扉に走り寄ったが、扉は開かなかった。 そう言うと、男は屋上から校舎内に通じる扉から消えた。 後から追

そこにあるだけだった。 も小さく見えた。マンションの一室だから特に目立つ訳でもなく、ただ、 藤は屋上の真ん中に座り、外の景色を眺めていた。その中に、自分の家 どうやら今日は平日らしい。校舎の中から人の声が聞こえてくる。加

り出し、学校の屋上は危険地帯と化した。加藤にとっての唯 あると言えば、 には屋根が無く、大粒の冷たい雨が加藤を打ち続けた。ついには雷が鳴 いうことだ。空が光り、遠くに鋭い落雷が見えた。 終礼が終わるくらいの時刻になると、急に強い雨が降り出した。屋上 屋上の端の方に一本の避雷針が頼りなく刺さってあると 一の救いが

「遠くで良かった。」

リと何かが張りさけ、 とつぶやいた瞬間、鈍い音が頭に直撃して、視界が白くなった。 訳がわからないまま気を失った。 バリバ

がする。誰だろう。 全身がだるくて、指先が痛い。重傷なのだろうか。あれ、誰かの呼ぶ声(かんり)がである。救急車の音だ。ああそうか、自分は倒れたんだ。

誰

じって、加藤は立ち上がった。
じって、加藤は立ち上がった。その真ん中に、自分ではなかった。救急車で運そこは灰色の屋上だった。その真ん中に、自分ではなかった。ただのばれている人も、誰かに呼ばれている人も、自分ではなかった。ただのだれている人も、誰かに呼ばれている人も、自分が寝ている。救急車で運

た。その木を眺めていた加藤は、ふと屋上に立っている避雷針に目をやっであったその木は、真ん中でさけていて、枝には燃えたような跡があったの木に雷が当たっていたということだった。校舎の三階くらいま背の高い木に雷が当たっていたとい、気を失った時、校舎のすぐ近くにあった

ぎょっとした。自分は今避雷針に話しかけたのか。当たらないようにしないといけないのに、木に当たってるじゃないか。」「避雷針としての役割どうなってるんだよ。雷を引きつけて他のものに

「まさか、君なのか。あの人が言っていた、僕と心が通じる何かって、

避雷針のことなのか。」

この瞬間、加藤の不完全な孤独は急変した。

声が聞こえた。
一段を探るように下りていくと、聞き覚えのあるような無いような細い塗りつぶされたような階段が続いているのが、うっすらと見えた。一段と手を伸ばし、ドアノブに手をかけると、扉は開いた。下の方へ、黒くと手を伸ばし、ドアノブに手をかけると、扉は開いた。下の方へ、黒く

「加藤くん、行方不明らしいよ。警察が明日から探すんだって。」

する人が。のどをつぶすように叫んだ。救おうとする人が。いや、自分を孤独から連れ去ろうと、引き離そうと血の気が引くような感覚がした。自分を探す人がいる。自分を孤独から

「探さないで。」

い。そう思えた。
い。そう思えた。
はっとした。自分がいるべきところは、ここ以外に無り前かのように自分を包んでいた。避雷針も、昨日と同じ位置に、退屈た。鏡のように、あるいは透き通ったガラスのように灰の中に溶け込むた。 の本を見ると、ほっとした。自分がいるべきところは、ここ以外に無その棒を見ると、ほっとした。自分がいるべきところは、ここ以外に無り前かのようにしている。気が付くと、朝日に照らされた灰たちが、当たい臓が壊れそうだった。気が付くと、朝日に照らされた灰たちが、当たい。そう思えた。

た。をただぼんやりと見つめ、時折それに映る雲の影を何も考えずただ眺めをただぼんやりと見つめ、時折それに映る雲の影を何も考えずただ眺めこの屋上に来てから、加藤は空腹や喉の乾きを感じなかった。避雷針

「これから僕はどうなるんだろうな。」

た。 上の端の方にある溝に隠れた。しばらくすると、大人の男の声が聞こえ 無意識につぶやいた時、ドアノブを下げる音がした。加藤は反射的に屋

「あれです。あの避雷針が壊れていると思うんです。」

そうだ。そいつは壊れている。ということは。

「取り替えが必要ですね。明日改めて来校します。」

のは。だけではないか。ただ、そいつがいなくなったら、この灰の屋上に残るだけではないか。ただ、そいつがいなくなったら、この灰の屋上に残るえが何だっていうんだ。昨日初めて見て、何となく話しかけてしまった人は去っていったが、加藤はしばらく息を殺していた。避雷針の取り替

「寂しい。」

きて、しかし食欲は無くて、しばらくすると校庭で遊び出す人が出てき今日は時間の流れが遅かった。昼になるとおいしそうなにおいがして

うに、避雷針の姿はこの日ずっと変わらなかった。て、予鈴が鳴ればまた消える。そんな色味の無い景色に退屈するかのよ

になれる。自分が望んでいたことだ。の鈍い音が耳元をかする。もうどうでも良かった。これで、本当に一人うに隠れながら、作業の音を、冷めた気持ちで聞いていた。時折、金属ついに朝になり、昨日の作業員が入ってきた。加藤は、昨日と同じよ

た。脱力して座り込み、弱い風に意識を流した。自分一人。あいつがいた場所には、似合わなかった。景色も、コンクリーそんな美しいものはこの場所には、似合わなかった。景色も、コンクリーそんな美しいものはこの場所には、新品の、つやつやした避雷針が、真っキが、この場所にあるもの全てが灰だから。もう、加藤は何も感じなかった。脱力して座り込み、弱い風に意識を流した。

日が暮れ、屋上は闇に包まれた。屋上から見える住宅街には、ぽつぽられていく明かりに日を動かしていた。すると、ある一点でその目と、小さな明かりが灯された。冷えた空気で目を覚まし、加藤は新した。手が届かないことを望んでいた。それは、特別きれいだった訳ではない。縦長の棚に並べられた薬瓶の一つのような、しかし、瓶が映しているのは蝋燭の光で、温かさがあるような気がした。その薬瓶に、蝋燭いるのは蝋燭の光で、温かさがあるような気がした。その薬瓶に、蝋燭いるのは蝋燭の光で、温かさがあるような気がした。その薬瓶に、蝋燭に、手が届かないことを望んでいた。一人でいられることを望んでいた。しかし避雷針が取り替えられることを知った時、確かに寂しさを感じた。

そこには「孤独をお届けします。」というにじんだ文字。裏面を見るこた。気になってポケットから取り出すと、それは小さな紙きれだった。のか、壊れた携帯電話をポケットにしまうと、右手の親指に何かが当たっと先日見たテレビ番組の話で盛り上がっていた。いつ川か池に落としたいつものように、加藤は登校していた。白い息に包まれながら、友人まぶしすぎる朝日に照らされた灰の屋上には、誰もいなかった。

促されるままに、学校への坂道をかけ上がっていくのだった。ともなく、加藤はその紙きれをポケットにしまった。そして、友人に催

ぐりーんあっぷる

東京・安田学園高等学校 二年

瀧口 夏鈴

「今日、終わっちゃうな…」

りの奥に吸い込まれていく。彼の耳には届いていないようだ。向けるでもないそのつぶやきは、バケツをひっくり返したような土砂降わずかに聞こえる午後五時を知らせるチャイムとともに吐いた、誰に

「雨、早く止まねえかな」

彼は私の隣でスマホ片手に空を仰ぎながらけだるそうに漏らす。

「私はこのままでいいな」

どんよりした分厚い雲に視線を移す。彼の言葉に返しながら、つられて私も、油絵の具で何層も重ねたような

「ずっとこのままで…」

れいな空色だったはず。彼も無言で私の隣にドカッと腰を下ろす。かった。青い塗装が剥げかかり、所々錆が目立つベンチ。小さい頃はき私はその放送を聞いて、ホームの内側にぽつりと置いてあるベンチに向駅の構内放送が鳴る。どうやらこの大雨で電車が遅れているらしい。

「雨、好きだったっけ?」

仮が問う。

「雨は別に好きじゃない。でも今はこの天気が好き」

ざああっと、私たちを外の世界から遮断するように唸る雨音は止まる気

「こう」「配を微塵も感じさせない。それがなんだか心地いい。

「そうか…」

こう首をかしげながらもうなずく彼はそれ以上この話を続ける気はないよう

ような感覚が私を包み込む。永遠にこの空間が続くような。時間という、沈黙。雨の強さは変わらない。時間という枠組みからはじき出された

概念が存在していないような。

「時代、変わるらしいな。 『令和』だって。変な名前

彼はふと思いついたように言った。

を滲ませながら待ち望んでいる。に新しい時代が訪れるのだ。誰もがその『令和』時代の幕開けを、期待そう、先日政府から新しい元号が発表された。あと一か月もしないうち

「どんな時代になるんだろうな。なんかワクワクするな。名前はダサい

けど

彼もその一人らしい。微笑みを滲ませて。

「そうかなあ」

ため息交じりにぽつり。

「私は…いやだなあ」

「なんか、うん、いやかな」か、平成最後の歯磨きとか、平成最後のあくびだとかいうのだろうか。平成最後の誕生日。平成最後の春休み。そのうち、平成最後の食事だとこの一年ほど、巷では、平成最後の○○というワードが流行っている。

「そうか…」

年間ずっと私と一緒に生きてきた時代が幕を閉じようとしている。

私という存在が風化していくような、恐怖にも似たこの感情。この十八

けられたか。この、太平洋かの如く広い心に触れると、なんだか妙に安彼の全てを包み込むその仏のような性格に、私は小さいころから何度助

心してしまう。

「変わるの、好きじゃないの」

「変わるの…??」

彼は私のほうにゆっくりと顔を向ける。私は雫が地面をたたくのを眺め

「可いごを開く。

になるから」
「何かが変わるのって好きじゃない。私だけ置いて行かれたような気分

彼は黙ったままで私の顔を見つめている。視線を感じる。

ずんずん行っちゃうの」「卒業とか好きじゃない。みんな私のことなんか忘れて、遠いところに「卒業とか好きじゃない。みんな私のことなんか忘れて、遠いところに

合ったり、新しい生活の様子を報告しあったりなんかをしていたけれど、抱擁を交わした友達。卒業から半年は一定の頻度で集い、思い出を語り中学の卒業式。一か月に一回は絶対集まろうね、なんて大泣きしながら

にいる。彼らは今を生きている。彼らにとって私はもうすでに過去のも私の携帯の写真フォルダーにはもう二年ほど彼らとの写真が更新されず

くて、悲しくて、やりきれなくなる。

のなのだ。色褪せた思い出になっているのだろう。それがなんだか悔し

「天気も、私を置いていくの。私のことなんて興味ないみたいに、雲は

すごく早く流れていくし」

な雷でもいいから、姿を変えずに私のそばにあってほしい。突き刺すような晴れ間でも、凍えるような雨でも、地球ごと破壊しそう

「それから…」

言葉を探す。

「それから…?」

「それから、私は時間が好きじゃない。時間って、すぐに行っちゃうん

だもん。私がいくら待ってって言っても待ってくれないし」

何もしなくても今日は足早に過ぎて、明日は淡々とやってくる。今だっ

私のようなのろまはいつも時間に振り回される。焦れば焦るほど足は絡んかも決まっていて、それに向けてせっせと走っているのだろう。でもと私はふと思うことがある。時間と息がぴったり合う人は、もう進路なて、時間は流れている。人間は時間と二人三脚でもしているんだろうか

「ふーん…」

まりあい、もつれあう。

がう。何か考え込んでいるような、険しい顔をしていた。彼は視線を雨に戻した。再びの沈黙。今度は私が横目で彼の表情をうか

「ずっと雨だと果物は育たないからなあ」

··· < ?· _

唐突に飛び出してきたその言葉に私は素っ頓狂な声を出してしまった。

「俺リンゴ好きだし」

「はあ…?」

れでもずっと雨でも育たないよ?俺、リンゴ食べたいから、晴れも雨も「天気が変わるの好きじゃないって言ってたじゃん。果物は、ずっと晴

困惑させる。彼の頭の作りはどうなっているのか、割って確かめてみた独特なテンポと独特な世界観を持っている彼のセリフは、ときどき私を来てほしいなあ。雷は怖いからいやだけど」

「そこなんだ」

いと何度思ったことか。

「リンゴ、おいしくない?」

「え…まあ、おいしいかな…」

と一緒に焼かれた焼きリンゴもおいしいけど、やっぱり生だよな、生の「リンゴの甘さが引き立つアップルパイも好きだし、たっぷりのバター

リンゴが一番うまい」

入ってしまった彼が、リンゴの種類の説明だの、リンゴの良い保存方法うん、うまい、と腕を組んで何度もうなずく。もう彼のペースだ。熱の

のろのろと駅に入ってきた。だの、リンゴの隠れレシピだのを力説している間に、電車は亀のように

リンゴの肉巻きを作ってくれるらしい。なんだそれ。ている。私に合わせてゆったりと歩いてくれる彼は、今度私にお手製の彼と私は同じ駅で降り、並んで歩きだす。二人の手には傘がぶら下がっ

が終わったところ。私と彼との別れ場所の小学校まであと数歩。 一通りのリンゴ談義(といっても私は適当な相槌を打つだけだったが)

「変わっていっていると思うよ、祐希も」

「え?」

けど…」「俺から見たら祐希も変わっていっているよ。なんか、うまく言えない

彼だから。 らも誰よりも観察眼が優れていて、ものごとの本質をサラッととらえる聞いていないようで聞いている。何も気にしていないような顔をしなが

て舌」いよ。急がば回れっていうか、それなら祐希らしくゆっくり歩こうぜっいよ。急がば回れっていうか、それなら祐希らしくゆっくり歩こうぜっ「祐希がどんなに焦っても時間は早まらないし、遅れたりなんかもしな

てくる。のか。彼の放つ言葉は何にも引っかかることなく私の中にすとんと落ちのか。彼の放つ言葉は何にも引っかかることなく私の中にすとんと落ちそれは彼なりの励ましなのか、単に思ったことを言葉に起こしただけな

を私に向ける。 彼は真夏の太陽のような、雪の中に実るリンゴのような、まぶしい笑顔ど、焦っているみたいだけど、俺はのんびり屋の祐希が好きだから」「最近、進路のこととか?友達関係とか?いろいろ悩んでいるらしいけ

見慣れた小学校の校門前で足を止める。私たちの母校。毎日へとへとに「天気みたいにどんどん変わられても、俺、目が回っちゃうし」

うちに鮮やかな赤色から漆黒へと塗り替えらえていく。なるまで走り回っていたのが冗談に思えるような小さい校庭は見る見る

「それじゃ、また明日」

「うん、明日ね」

短い挨拶を交わして、私はそのまま直進。彼は左にそれる。

透けるような、それでいて堂々とした月が顔を出す。明日は晴れるらし、乾ききった傘を腕にぶら下げて私は歩く。大きな太陽が帰る代わりに、

°,

機械仕掛けのヒーロー道

神奈川県立横須賀高等学校 二年

水田 里緒菜

『被害状況確認。第三等機巧行使ノ必要性有リ。使用許可申請—— 許

可確認。コレヨリ、任務ヲ開始スル。』

背中がガパリと音をたて、熱を持つのが分かる。周りの景色が急速に

遠のいて、逆に目的には近づく。

「わあっ!」

短い悲鳴。それをあげた少年に手を伸ばし、抱きかかえて離脱。少し

飛んでから地面に降ろした。

「あ、ありがとう!」

ぎこちない声と顔でお礼を言った少年。言われた方はにこりともせず、

その角ばった手を少年の頭にのせる。

『遠クへ。』

「うん!」

少年の見る人影の後ろには銃の乱射音が響く。倒壊するビルが盛大な

音をたてていた。

人々の絶叫が交差して、噴煙が辺りを炙る。

元気よく返事をした少年を見て、彼は再び飛び立つ。文字通り、大空へ。

「ありがとー!セントロ!」

その彼を追うように少年は叫ぶ。

彼の名は「セントロ」。

世の中を守る為開発された戦闘ロボット。

彼ら戦闘ロボットは、その活躍の華々しさからこう呼ばれている。

「ヒーロー」と。

『コレガ今回ノ活動報告デス。』

「ふむ。なるほど、素晴らしい。」

今セントロがいるのは、高度AIを搭載した戦闘型ロボット「ヒーローージャーだる」と「雰囲にしい」

ズ」のコレクションを展開している大企業、田畑電気の社長室だ。社長

は今、自身のパソコンに送られてきたデータを満足そうに見ていた。

「これほどのテロで被害がこれだけしかなかったのは鼻が高い。よく最

小限に抑えた。」

具文質)万牛、とはち口へト・・・○○

社長の笑みと声音を関知し、セントロは学習する。そしてこの場での

最適解を選択する。

セントロは人形のように綺麗で精巧な顔をお手本のように歪めた。

「笑う」ということを覚えたのだ。

社長はそれを見てさらに笑みを深くする。

「ヒーローというのはいつだって多くの人間を助けるんだ。命の危機に

直面している人を不安にさせないように、笑ってね。」

『多クノ人ヲ……笑ッテ…。』

「そうだ、頑張れよ。」

社長はそう言ってセントロの肩を叩いた。

ピピピ、ガガ。

彼は学習する。

脆弱な人間が積み上げた歴史を嘲笑うかのように破壊していく。それ 大地が揺れる。かつて人々はそれを、神の怒りであると言った。

に呼応するように大海が、大気が震えた。

セントロへの出動命令はすぐに出された。

『現場ニ到着。現時点デノ情報ヲ分析。』

状況や周辺の建造物や地形などを分析し、活動方針を確定する。 セントロは活動の前に状況の確認をする。警察、消防などからの被害

『分析完了。現状ヲ第一等特別災害レベルト認定。活動ノ許可証ヲ確認。

コレヨリ、 救助ヲ開始スル。』

ヴィーンと、セントロの身体中から駆動音が響く。コアが白熱し、 圧

倒的な熱量をもってセントロは飛翔する。

昼間に起きた大地震は大火災を引き起こしていた。周囲は火災に包ま

れている

そうな会社員を、出口のなくなった学校の生徒たちを。雷鳴のように速 く、岩石のように力強く、そよ風のように丁寧に。彼は駆け回った。 そんな中、燃える家の下敷きとなった家族を、ビル倒壊に巻き込まれ

セントロの働きは凄まじく、人間の何十倍も速く救助していた。

人々は彼を「ヒーロー」と称え、その姿を見ると安堵し、歓喜の声を

あげる。

稼働できていない。いくら高性能とはいえ、セントロの限界は近かった。 『エンジン許容熱量オーバー、緊急冷却開始。 右腕関節損傷。 両足全焼

歩行困難。

飛行モードニテ任務ヲ続行。』

しかし、この大規模災害に巻き込まれ、他の戦闘型ロボットの多くは

傷ついても人を救い続けるのがヒーローであると学習したから。 令はただひとつ。「ヒーローであれ。」だから、彼は諦めない。どれだけ それでもセントロが活動を止めることはない。彼に与えられている命

田畑電気の社長は少年漫画のファンだ。その影響からか、セントロ

社長からヒーローを学習することが多かった。

―「ヒーローはどんなときも強気なんだ。」

だから体が壊れそうな難所でもためらわずに飛び込む。

「ピンチのときには必ずやってくるものさ。」

こうして積み上がっていく感謝と笑顔を観測し、セントロのシステム だから状況を分析して、命の危険ギリギリを狙ってタイミングを見る。

は軌道にのる。

-ビービービービー-

突如セントロから警報音が鳴る。爆音のそれと一緒に流れ込む情報。

判断は一瞬の

『津波ガキマス!逃ゲテクダサイ!』

道の瓦礫をどけると、人々はセントロの誘導に従って高台へ行く。

それを尻目に、セントロは海沿いの方へ飛び立った。

海沿いには何人もの人々が取り残されていた。セントロは即座に分析

を始め、ヒーローっぽい助け方を心がけながら救出していく。

勇敢かつ大胆に、繊細かつ鮮烈に。

そうしている間に大津波はすぐそこまで迫っていた。—— そんなと

きだ。

「た、たすけて!」

人の声を感知し、声のした方へ。

そこには家から出られなくなった家族がいた。

赤子を抱く母親、その横に父親、後ろには中学生、高校生ぐらいの子

供が二人。

「助けて!私のことはいいから、子供たちだけでも!」

そう訴える母親を眺め、セントロは今の情報を精査する。

『サァ、安心シテクダサイ。大丈夫デスヨ。ワタシガ助ケニキマシタカ

ラ!

そう言って、セントロは気球の籠のようなものを取り出した。これに

乗ってもらい、セントロが運ぶのである。

「ありがとうございます!_

家族は次々と籠の中へ。全員が喜色満面だった。

しているのだ。津波が近いにも関わらずだ。時間的に往復も難しいが、 しかし、状況は厳しい。全員運ぶには、ギリギリ耐荷重量をオーバー

応援も期待できない。

ならば、 判断は簡単だ。

—— え?·_

籠に乗った母親から間の抜けた声が出る。

それもそのはず、彼女の腕の中にいた赤子が放り投げられたのだか

ら。

『モウ大丈夫。アナタタチハ助カリマス。』

呆然と見上げてくる母親にセントロはヒーローらしい笑顔を浮かべ

た。

「ヒーローはいつだって、多くの人を助けるんだ。」

全員は救えなくても、多くを救えれば

「不安にさせないように、笑ってね。」

いつかの社長のヒーロー像通りだろ?

母親の絶叫が聞こえる。しかし、セントロのシステムは何も感じない。

だってこれが正しいのだと学習したから。

空には、報道へりが舞っていた。

「ヒーローの顔をした悪魔。」

「ヒーロー気取りの人殺し。」

「ヒーロー・セントロは失敗作。」

その後セントロに対する評価は地に落ちた。

赤子を投げる映像が連日放映され、その残忍な光景を前に誰もが彼を

糾弾した。

そして、今セントロがいるのは、 暗く広いコンクリートの中。

地下に

深く筒のようになっている場所だ。

『今回ノ事案ノ問題点ヲ分析。 -理解、 不能。 再度実行…』

セントロはもう動くことができない。体はバッキバキに破壊され、 頭

部のみが残った。

バチバチ、バチバチとセントロの視界が弾ける。 切れた導線がスパー

クしている。

-理解不能。 -理解不能。

何度分析しても結果は同じ。

ただ学習した通りにしただけ。求められたヒーローになるため最善の

選択をしたはず。あれをしなければ、一家全員が死んでいた。一人でも

多く生きているのなら、それで十分幸せではないのか。

そこまでで、セントロの瞳から人工的な光が消え失せる。ヒーロー・

セントロはここで死んだ。

彼の名はセントロ。

千十六番目の戦闘型ロボット。

いる。
彼の下には同じようにスクラップされた、千十五機の残骸が積もって

人の偶像に操られた、人形の残骸である。

遊離魂

東京・巣鴨高等学校 一年

溝上 大翔

「はは、考え過ぎだよなあ。」

なりそうなとき、何度も心の中で唱えるのだ。私の口癖だ。口癖、といっても口に出すのではない。心配でどうにか

意味を感じない。過去のことを考えることは嫌いだ。ではないことは、分かっている。いつからこうなったか。考えることに私は昔から極度の心配性だ。だが、生まれつきこんな性格だったこと

だから洗っている途中、奥に手が当たった。何かが心配になって手は洗を蹴飛ばしながら洗面所に向かう。徐に手を洗う。奥行きが狭い洗面台重い。白黒の世界で昨日と同じ行動をする。布団の周りのごみ袋や酒瓶朝が来た。毎日同じ行動の繰り返しでもう飽き飽きだ。身体がとても

働き続け、家に帰って眠った。明日も同じだろう。 職場である工場へ向かうため歩いた。着いてからは、感情を無にして

い直した。

かな春の丘だった。日差しが暖かく、草花の香りが心地良い。 目覚めたら散らかった白黒かと、思った。だが違った。そこは色鮮や

横には父がいた。此方を向いて微笑んでいる。

手足がやたら短くなっていることを不思議に思っていると、目の前を

蝶が飛んでいった。

考え過ぎだ、と堪えようとしたが、心配の念が強かった。 突然、絶対にその蝶を捕まえないといけない気がした。いや、ただの

よりずっと柔らかく、声は高かった。
文に蝶を捕まえに行くことを話し、立ち上がった。話そうとした言葉

はずである。後ろを振り返った。私を動かした。しかし蝶は遠くへ逃げてしまった。後ろで父が見ていた息が切れてきた。しかし諦める気は起らなかった。疲れより強い心配が小さい背丈で懸命に捕まえようとした。蝶はあちこちに逃げてしまう。

父はいなかった。

見合わせて言った。
いっしょにたべよう、と家族に向かって言った。すると家族は、顔をかった。良い匂いとやわらかい暖かさを感じ、食卓へ向かった。私を除いて食卓を囲む家族の影が見える。さっきと同様背丈は小さ

「あなたは誰」

ら消えて欲しい。今日も夢以外変わらない一日だった。夢だったが、起きる前に見た二つ目が頭に強く残る。夢だから早く頭かいつにも増して気分の悪い朝だった。二つ夢を見た。どちらも酷い悪

ても暑かった。だが吹き抜ける風は涼しかった。横には母が立っていた。また白黒では、無かった。そこは肌触りの冷たい夏の小川だった。と

りがにが見えた。 とても背の高く見える母に感動を覚えていると、小川の中に小さいざ

ぎだなあと思った。しかし心配には勝てなかった。 突然、絶対にそのざりがにを捕まえないといけない気がした。考え過

いた。しかし、ざりがには下流へ流されていってしまった。 小川のほとりにしゃがみこみ、短い腕を精一杯伸ばし、川底を引っ掻

残念に思っていると、悪い予感が胸からこみ上げてきた。後ろを振り

返った。

母はいなかった。

見合わせて言った。 かった。良い匂いとやわらかい暖かさを感じ、食卓へ向かった。 いっしょにたべよう、と家族に向かって言った。すると家族は、 私を除いて食卓を囲む家族の影が見える。さっきと同様背丈は小さ 顔を

「あなたは誰

日だった。 り二つ目の夢は吐き気を催す程の悪夢だ。春夏、と悪夢が続いている。 ただの偶然であって欲しい。秋が恐ろしい。今日も夢以外変わらない一 嫌な朝だ。 あの酷い悪夢が連続するとは全く思っていなかった。やは

こは虫の音響く涼しい秋の夜だった。古い一軒家で布団を敷いて、両親 と並んで寝ていた。枕から石鹸の優しい香りがする。 私はこれを恐れながら、密かに期待していたのではないだろうか。 そ

人と並んで寝ることに新鮮さを感じていると、開いていた窓から鈴虫

が入ってきた。

突然、絶対にその鈴虫を捕まえないといけない気がした。考え過ぎだ

なあと思った。だが心配を信じるべきと強く思った。

少し隙間を開けて両手の中を覗いた。鈴虫はいなかった。 できるだけ静かに鈴虫に近付いて、両手をその上にかぶせた。そして

気分が悪くなった。後ろを振り返った。

父も母もいなかった。

かった。良い匂いとやわらかい暖かさを感じ、食卓へ向かった。 私を除いて食卓を囲む家族の影が見える。さっきと同様背丈は小さ

見合わせて言った。 いっしょにたべよう、と家族に向かって言った。すると家族は、 顔を

「あなたは誰」

朝だ。全身に倦怠感を感じる。この夢を見始めてから寝ても全く寝た

気がしない。だが、それより悪夢による消耗が激しい。

け出せないのではないか、ああ、心配だ、心配でならない。 が心配でならなかった。冬が終われば春が来て、また冬が来て永遠に抜 春夏秋、と夢を見た。冬が恐ろしい。勿論内容も恐ろしいが、その後

見ないのかもしれないのである。いや、きっとそうだ。明日からまた退 はは、考え過ぎだよなあ。心の中で唱えた。冬が来ればもうこの夢は

屈な日々に戻るのだ。さらば悪夢。

なかった。まあ、いつものことだ。今日も夢以外変わらない一日だった。 そう虚勢を張ったはいいものの、 心配は拭い切れず、 仕事に身は入ら

もうこの夢を見ないとは思えなかった。そこは北風の冷たい冬の幼稚

しい。迎えに来た母が見えた。 そろそろ帰る時間ら園だった。庭に植えてある葉の落ちた木が見える。そろそろ帰る時間ら

なさい、と言った。
母と繋いだ手の温もりに切なさを感じていると、母が友達を連れてき

走っている途中、友達が遊具の向こう側へ行くのが見えた。白く暖かい庭の遊具で遊ぶ友達が見えた。見つけるなり短かい脚で必死に走った。

そう分かった途端、身体が震え始めた。明らかに寒さによる震えでは

息を吐きながら、遊具全体を探した。どこにも友達はいなかった。

母はいなかった。

なかった。震える首で後ろを振り返った。

見合わせて言った。
いっしょにたべよう、と家族に向かって言った。すると家族は、顔をかった。良い匂いとやわらかい暖かさを感じ、食卓へ向かった。私を除いて食卓を囲む家族の影が見える。さっきと同様背丈は小さ

「あなたは誰」

れてしまうと考えると、妙に惜しくなってしまった。夢は恐ろしいが色鮮やかで退屈しなかった。白黒で退屈な現実だけ残さと安堵していた。それと共に、別の感情が湧き上がってくるのを感じた。朝になった。まだ身体が震えていた。多分、これで終わりだろうな、

いるようだった。そう考えると、現実でしている退屈な行動が阿保らしいつしかまるで夢が現実に代わるほどに、心を支配し、彩りを与えて

く感じはじめた。

家から飛び出し、工場とは逆の方向へ全速力で駆け出した。随分長い

間走っていた。全く疲れを感じなかった。

頭を打った。そのまま気を失ってしまった。 下り坂に向かったとき、足がもつれて転倒してしまった。とても強く

笑顔で立ち上がった。 食卓の前で足がもつれて転倒してしまった。笑ってくれると思って、 れは嬉しかった。食卓へ歩いて向かっていたが、走って向かった。 私は嬉しかった。食卓へ歩いて向かっていたが、走って向かった。 私は嬉しかった。食卓へ歩いて向かって微笑みながら言った。 私を除いて食卓を囲む家族の影が見える。さっきと同様背丈は小さ

家族はいなかった。

入選

「夕焼け」

宮崎県立宮崎西高等学校 二年 長谷川 向日葵

「うずしおライダー」

兵庫県立長田高等学校 二年 檍 里佳子

兵庫県立長田高等学校 二年 本田 雄璃

「交換日記」

「或る絵描きの話」

「破る」

福岡·筑紫女学園高等学校 三年

緒方

杏里

静岡・沼津工業高等専門学校 一年 佐藤 舞佳

短篇小説の部選評

作家

井上 孝雄

は例年と変わらないものだと思います。減少はありましたが全国から集まった熱い思い近くが集まりましたが今年は六六九編に、若干せていただきました。昨年は空前の一○○○編や回で、本コンテスト五回目の選考を務めさ

今年の特徴として、「美術部」、「絵描き」、「色」などをモチーフにした作品が多数見られました。芸大を目指す若者たちを描いた人気の漫画た。芸大を目指す若者たちを描いた人気の漫画が流行っている、もしくは「美術部部員」というのが理由かも知れませんが一つの傾向として見られました。もう一つとして、小説の中に和歌られました。もう一つとして、小説の中に和歌られました。現代小説と古典文学が融合し作品に深みを与えており良い傾向ではないかと考えに深みを与えており良い傾向ではないかと考えます。

思います。かったため優秀作品二編について論評したいとか年は残念ながら最優秀賞は該当作品がな

歴がずらり、返信すると小学校二年生の妹が五放課後、気がつくとスマホに母からの着信履

時を過ぎても帰らない…。探し回った結果、つ時を過ぎても帰らない…。探し回った結果、つ時を過ぎても帰る。のののでは、その謎の行動が次第に解なぜか絵の具だらけ、その謎の行動が次第に解き明かされ作品に引き込まれていきます。幼いされた品に引き込まれていきます。幼いされたのでは、そのはのです。川原の妹はでは、までは、このがとても鮮やかでイメージを喚起させ印象に残る作品です。

に仕上がっています。 生き物なのかを考えさせられ完成度の高いもの 人の諍いは誰も知らない」という一文で終わる 登場し文学マニアにはたまりません。「此の二 りが漂います。しかもよく読むとロシア文学も た親友の刀匠が本人の目の前で意外な行動を 文豪を思い起こさせます。作品の舞台は数多く です)で書かれています。そして文体も明治の 肉筆をご覧に入れられないのが残念、 小説は何が善で悪なのか、 人と誉れ高い男が起こした殺人事件、 の犯罪者か跋扈する天保年間の江戸。そこで善 もう一遍が『魂の怨嗟』、まずもってこれは (楷書で書かれていますが個性的な崩し文字 作品の至る所に、日本近代文学の名作の香 人間とはどのような 告白され 独特の文

す。全体的な傾向としてあまり力を注げてないトルをもう少し工夫してほしいということでトルをもう少し工夫してほしいということで

作活動の一つとして考えて下さい。ただけでわくわくするようなものを、これも創のではという印象がありました。タイトルを見

えることを楽しみにしたいと思います。に素晴らしい。来年も高校生たちの若い力出会毎年感じるのですが、若いエネルギーは本当

●井上孝雄(いのうえ たかお)

第七十七回高等学校部会) 美『水かまきり』―」(二〇一九年日本国語教育学会: ミュニケーションの多様性について考える―川上弘 のスキット授業―」(二〇一八年)。研究発表、 年)。「学習者と作る楽しい古典の教室―『伊勢物語 消える』(Losing Biue)を教室で読む―」(二〇一七 ての川上弘美『水かまきり』論―」(二〇一六年) (二〇一五年)。「三つの小さな物語 幽霊』論 ―作品の魅力と学習材としての魅力―. る。最近執筆の論文。「村上春樹『レキシントンの 論文の執筆や学会に於ける発表等の活動をしてい 教育部会の会員。高等学校の国語科教材について 育研究会、日本国語教育学会、日本文学協会国語 策局男女共同参画学習課研究員。國學院大學国語教 書房地域教科書編集委員。元文部科学省生涯学習政 究科博士課程前期修了。高等学校国語科教員。筑摩 「主権者教育についての一考察 ―村上春樹『青が 一九六三年東京生まれ。國學院大學大学院文学研 ―学習材とし

僕と乳房

兵庫·神戸大学附属中等教育学校

吉田 眞子

読まなかったのかな 何だったんでしょうね あの文 って それからです

ちちふさ 僕には無いけど やかましいわ そう これはちぶさ 漢字にすると乳房

僕の高校ん時のあだ名は

みんなで一行ずつ読むの あるでしょ ある日の五限 現文

僕ホラ思春期だったんで なんか 乳房(ちぶさ)が 僕が読む行に あったんです

さらりと読むのも恥ずかしい気が…

僕は乳房に興味が無い とみんな思う だからワザと間違えて読んだら しない? 僕はしたんです

> 誰かあれ乳房(にゅうぼう)って まるで流れる乳房(ちちふさ)のようだ」 「輪郭のぼやけた遠山は

そう考えて読みましたよ

優秀賞

タイムリミット

北海道・立命館慶祥高等学校 二年

二股に分かれた生命線が証拠 わたしは神の子なんです

村上 陽香

朝日が昇り

カーテンが開かれる

そこにいるのは隣のおじさん

マグカップにそそぐトマトジュースや

一日で半キロも違う体重計

指先が磁石なぬいぐるみと

二秒で書ける生年月日

死に顔なんて思い浮かばない友人に

明日手紙を書こう

わたしは元気です。 お元気ですか、 当たり前っていうものをつくると 焦らないと息ができないんです

それを失うのが怖くて

大丈夫、

当たり前が消えなくてこそ世の常です

万物はすべからく流転します

でも先生、

地球ごと反転した明日

この世から電池が一本もなくなっていたら?

それはまるで常夏のビーチ

きんちゃく袋におかねは入っていますか

焦りたいのでいれていない

くびからさげたそれは?

いいえ

お守りです

占い師に言われたもので

優秀賞

立ち止まって、一歩

埼玉·淑徳与野高等学校 二年

内藤

この夏はもう、逝っちゃったのに もうおわり、じゃ、ないだろう。

、今日、はまだ、離れてくれない。

結月

息を吐く。そうしよう。

おわり。

だから、おわり。

すいかを食べて、残った皮は白い。

いつか、分かるだろうから。

いってきます。声を上げて。

いってきます。足を出して。

いってきます。目を開いて。

太陽が白い歯を見せてにやり、笑った。

暑さは、気づいたらいなくなって、

まあ、誰も見てないけど。

息を吐け。生きてるしるしに。

おわり。夏の終わり。

隠れ家も消えてしまった。

ふわふわした存在に、ぶよぶよした時間

蝉は、やっと姿を見せたと思ったら、もう鳴かない。

ぐにゃりと歪んだ体は、いつの間にか羽だけだった。

蟻が、食べちゃったのかな。

「ねえ?」

誰もいないね。

息を吸う。それでいい。

もの思い

群馬·高崎商科大学附属高等学校

小板橋 彩花

って

ひとりぼっちの時

カチコチ時計が いつも壁に掛っててつまんねーんだけど。

外につれてけ

って

ショッピングモールに行った時

ひらひらワンピースが

わたくしあなたに似合うのではなくって?

ものが喋ればいいのになんて

時々わたしは思うの

そうしたら

キレイよね?

ワクワクよね?

ひとりぼっちが

たのしい一日に

なるよね?

パラパラ旅行誌が 自分的にはこっちなんだよねー ココがオススメって書いてあるけど

旅行の時

って

もうホームに行ったほうがいいんじゃない?

学校から帰る時

電車のピポリン定期券が

って

って わたしは思うの

現代詩の部

28

寂しくないよね?

みんなになって

感情の詰まったペットボトル

神奈川県立麻生高等学校 二年

安田

武流

トマトジュースは心に届く がぶりと一口

けらけら ころん すやすやすや

ああ店主、こんな気分は久々だ

このボトル売っておくれ 売っておくれ

ケケケ ケケケ

そんならあんたの感情売っておくれ

そしたら売るさ、このボトル

喜び一つ売ってはくださらねぇか

ケケケ ケケケそこの棚

お代は結構、まずはお試しあれ

店主や店主、ケケケと笑うのはいいが

そんな中でここを見つけたんですよ

感情を売っているとはこりゃすごい

そりゃロボットみたいにもなりますって

会社と家を往復する生活

あんたの疲労、感動、後悔

売っておくれ 売っておくれ いや店主、金で買わせとくれ

ケケケ ケケケ

勘違いしとりゃせんか

感情は金じゃ買えやせんよ

ケケケ ケケケ

だが店主、これじゃ仕事になりゃしない ケケケケケケケ次はほれ、そこの棚 こりゃすごい、思わず小躍りどこどこどん すっちゃら ぺっちゃら どこどこどん 黄色いリンゴが喉を下る

ぐびりと一口

次は安心、安心さね

金曜日

東京都立日比谷高等学校

浜口 すず

ひとみの鮮やかな彫刻を見るような眼で

この空の端から端まで行かないうちは 買ったばかりのヨーグルト あの空高く浮かぶひこうきが すずめ ここから動きません すずめは期待には応えられません すずめを見つめないで すずめ あのまっすぐな国道

腰をかがめて顔を洗うひと

たずねる子どもの ほっぺの赤み

「すずめはあの角を右にまがってどこへ行くの」

汗だくで起きる真夏の朝のかすかな緊張 ノイズの消えない古いラジオ

佳作

幽霊

東京・田園調布雙葉高等学校 二年

幽霊になったらば

知り合いの阿呆の背中でも蹴ってやろう

本領

里緒

その辺が分かっているので、少しやさしく 馬鹿は愚鈍で、阿呆は愚直

力一杯蹴ってやる

肩身狭そうに丸まった背中も、すこしは真っすぐなるだろう

幽霊になったらば

育った町へ出かけてやろう

古い悪友どもに顔でも見せて

おめえら何も変わらねえななんて、カラカラ笑ってやろう

死んだ自分よりももっと死んでいるような

濁った目を、じっと覗いてやる

幽霊になったらば

人の顔でも見てやろう

思い切り頭から川につっこんで、カラカラ笑ってやろう

水が冷たくたって、汚くたって、かまうものか

川で水浴びでもしてやろう

幽霊になったらば

見えるか見えないか知らないが

そんなつまらない目も、少しは楽しくなるだろう

幽霊になったらば

朝から寿司屋にでも行ってやろう

うんと美味い寿司でも食って

こりゃあ死ぬほど美味いなんて、カラカラ笑ってやろう

埃をかぶった縁側に寝転んで

育った家へ訪ねてやろう

もう人の住まなくなったおんぼろ屋敷の

幽霊になったらば

日向ぼこでもしてやろう

ああ、生きてら

そう、カラカラ笑ってやろう

そして

現代詩の部

佳作

かわいい

岡山・岡山学芸館高等学校 二年

捉えられることがおおく

川上 紗和

行われることが多いのです それは自分自身で

擬似的な自己の確立をする様子は そこに粒子的な幸福を見出して

さながら

朝に焼きすぎちゃった焦げパンだ。

ねえ、

みんな「かわいい」から

不感症になっちゃえよ

なんかこわいもん

本物の白鳥でもヘプバーンでもないの あたしが求めているのは 周りに飛び散り周りを汚す ピクルスやケチャップが 体を蝕んでゆき

そこからとび出た

ジャンキーなハンバーガーのように

言葉が坩堝となり層となり重なった嫌悪が

さながら蜘蛛の糸のようなのです

肯定するということは

普遍的な愛であったり

自分が完成することだったり

そんなこと

ある意味真っ当にポップなことで 否定するということは

選

夜明け

福岡県立明善高等学校 二年

Ш 口 るみ

事実 この景色を見ることになる予感がする旅の写真集 紙魚でゆっくりと読めなくなっていく遠くの古典 獣の唸り、 下手に触れると凍ってしまいそうな真っ白い新書 逆回りには進めない、 花屋の店先と似た色合いのライトノベルの背表紙 読まれるまで大人しくいようと決めたホラー小説 暗がりでぼうっと青いサイエンス・フィクション 鼻を近づけたら金木犀がひっそり匂った恋愛小説 積み重なり上に檸檬まで置かれた画集の群れ群 吹き出しから抜き取った言葉の遊び場はエッセイ ぴっかぴかのオレンジ色で時計仕掛けの翻訳小説 背伸びしたって届かない位置にあった仕掛け絵本 黒々とした頁がちょっぴり開いているミステリー 棚のてっぺんから郵便受けから顔を出す冒険小説 キャンデーを集めて並べて綴じてきたような詩集 ヨンデヨン つやつやした手触りのこいぬ座まばたく天体図鑑 確かな重みを伴って本棚の上のほうに眠る純文学 (と写真と文字と知識) デヨンデと囁くみっちり詰まった文庫 魔法の息吹を閉じ込めたファンタジー 謎が大きく渦巻く大河小説 を愛している大辞典 n

ピアノの陰になり子らは「荒城の月」を歌ったかえび茶袴の女教師はストップを引いたか天正十二年製の君よ 村の会堂のまんなかに 今日 生命をふきかえした 時代を駆け抜けたオルガンよ

まるでペダルの上下が見えるかのように人々も歌い出す春の息吹を存分に吸い込んで私はペダルを踏み込む

空へ空へと昇ってゆく一人一人の心と結ばれて天使の高らかな歌声が

1は途切れない という足踏みオルガンよ鍵盤を押し続けていれば 岩にしがみつく人のごとく 足を踏み続けていれば しを踏み続けていれば しななりないでとく

かみさまが住んでいるのだろうきっと ح のふいごの中には

その後広がる残響よ 歌が止む

音

だから午前5時の市立図書館はこんなにも忙し

東京・女子学院高等学校 菊地 **愛**二 佳年

現代詩の部

入選

溺れる季節

沖縄·N高等学校 沖縄伊計本校 三年

島川 亜弓

アイロンをかけて、 アルバムからはみ出して、 白い春 校門を

あの時、病院が間に合っていたら、 ちぎれた夕焼けを踏むこともなく 部屋の隅で眠り

電車はまだ嫌いです

今、とか

哀しみを揺らして、わたしはわた しを許せない

猫の鳴く声がふつうであったな

また、夜が来るだけを待ち

5 きっと、きちんと、乗り換えがで

きたのに

最後に一ど、ちゃんとできた一に

「今はもう、ダムを見に行くこと

ち、もう一ぺん、 紙に収まらなくてもいい

> たまにおかしくなったりしていま もなく

一枚にわたしは、 収まってしまう

何度も、

けど、元気です

りられなかった朝などで、 終わらなかった宿題や、車から降

殺しきれない季節を、愛してしま ふつうを数えても

います やっぱり、一枚には収まらず

判子を押した指先で 人生を削っては、文字にしていま

> 娘は不思議そうな顔をしていた お母さんは強いからよ と答えた

> > 送り出していた

しはわたし) す (すみません、ただ、でも、わた

珈琲に溶かしては夜を越す なつかしさをひとさじ

入

選

家族

埼玉県立春日部東高等学校 関口 二年 凌真

しばらくたって 娘は年を取った

どうしてお母さんは泣かないの わたしは いつの日か 娘は言った

ある夜 わたしも 何も言わず 私に寄り添ってくれ 娘は何も言わなかった

娘の手には 少しして 娘は笑った 娘は一人で泣いていた 娘に何も 言わなかった 大切な人の手が握ら

娘は愛を知った 何も言わずに わたしも 笑った

れていた

また少したって 娘は笑った

> わたしは 的な笑み

この世で最も美しいだろう

娘の腕には小さな命が抱かれてい 何も言わずに 涙を流した

だった そっと娘の わたしは 娘は今日も笑顔で大切な人たちを 少し白髪も 混じってきたよう 頭を撫でた

娘は苦しそうな顔をしていた 声にならない 悲鳴を上げた わたしは 糸の切れた 操り人形みたいに ある朝、娘は倒れた

わたしは 深い深い お疲れ様 木漏れ日の差し込む昼 と言った 眠りについた 娘は眠

娘の娘を 私と娘は 見守っている 二人一緒に 娘は泣きながら笑っていた

神秘

銀

東京·桐朋高等学校 小俣 卓一紀年

誰もいない公園のブランコが揺れ そこにぴゅるりと木枯らしが吹「公園のブランコ一人こぎ出して

通学すると決めている

まるで、見えない誰かが、乗って いるように

コの揺れるのが先だったのか 木枯らしが先だったのか、ブラン 木枯らしがぴゅるりと吹く

誰も知らない

をやめ流されてみる」 たったそれだけで、景色が違う いつもより1本電車を早くした 「早朝の通学路には向かい風抵抗 向かい風に逆らうのを止めてみ

流されるまま進んでみよう

昨日とは違う一日になるかもしれ

制服にマフラーはおって歩いて

それでもきっと、明日も学生服で 負けそうなほどの木枯し なんとなく、 冬でも学生服のままで通学してい も木枯らし強し負けそうになる」 風が強い朝 マフラーひとつくらい羽織っても 学生服のままが好き

誰もいない境内 いる これでもかというほどに連なって 神に託した絵馬が 飛ぶ湯島天神に人の影なく」 それぞれの願い、それぞれの想い 「まちまちの願いを載せて絵馬が

物音ひとつしない夕方 はり気のせいか 絵馬が飛ぶ音が聞こえたのは、 Þ

僕しかいない空間、遮断された世 屋は銀の箱に変わった だけがいて何故か落ち着く」 カーテンを閉めたその瞬間から部 「カーテンを閉めた瞬間銀の箱僕

何故なら、いつでもこの箱から抜 そこにはまだ怖さはなく、安堵す る僕がいる

け出せることを知っているから

入 選

微塵ものこっちゃいないでしょ みじん切りにしよう うんそうだ だって おもい なんて なにものこらないくらいにさ

Refrigerator

前 仏頂ヅラして仁王立ち

積み上げた モノ に あんなに ながい 時間を 常套句なんて 聞き飽きた 罪悪感と切り刻む作業 小指の爪の先程度の かけて

答え 一切 明快 未練は

ないのか?

あ 無邪気なあの子に、 すべて、すべて忘れて 諳んじることはもう無い 白んでゆく空に 立って 探し 待って居る 今日も夜明けのkitchenに 何食わぬ顔で笑っていよう の子の笑顔に

みじん切り

福岡県立明善高等学校 二年 伸陽

が果がる

朝 に 海 が き た

ようにその

栫 伸太郎鹿児島・ラ・サール高等学校 三年

入

選

呼ぶ笛に答えはない 光の先に見えたのは 光の中を透過して 光を眩しく反射して 笛の声は美しい 突飛な空はピンク色 ピュアな心で隠秘した ピョンピョンと 空を跳ねて会いに行く 生憎羽は見当たらないが 雲から生まれたビー玉は 太陽の裏が見たいという

i 朝 その部屋の 部屋の

海がきた

鴎が生まれ

がストロー さいさな

から

ただの太陽の裏だった

ゆっくり飛んでいく 関が 関が に心と のがレキ のがしながら でいく

濡れたクチバシ太陽を食べようとしているらしいそのひとりでに浮かんでいる

東京・国際基督教大学高等学校 二年

牧野 かれん

入選

花火

千葉·渋谷教育学園幕張高等学校 二年

伊藤 寛子

わたしたちは笑ってる パステルカラーの箱の中

カレーが好きな人も

塾の課題をさぼった人も

スマホのケースを買い換えた人も

わたしは

先月お気に入りの小説をみつけたし

先週愛猫を亡くしたし

今は少し頭がいたい 今日は駅で麦茶を買ったし

真っ白な空気を 飲み込んで わたしは わたしたちに

よれたリュックに重たい荷物を抱えた私 プリーツの取れかかったスカートをはいた私

希望はどこに消えたのだろう

ふと手元を見ると

夜空に想いを重ね合わせる少女 下ろしたての浴衣で躍る少女

ああ、なんて素敵な世界だ

そこにいたのは

私は下を向いた

街は急に眩しくなった 暗闇に一瞬で燈を与えた 突然打ち上げられた花火は

表面をモルタルで覆うみたいに ベビーピンクのハートを添えて

わたしたちは笑ってる パステルカラーの箱の中 無機質で華やかでひどく平和な

リフレクトしていた

その背中には打ち上げ花火が

私は再び歩み始めた 闇の中の明るさを背に

選

息を 吸う

埼玉県立浦和第一女子高等学校

梶原 翠

37

現代詩の部

現代詩の部選評

水無田気流

今回、本コンテストは4回目の選考を務めさせていただきました。今年の現代詩部門への応募作品数は852篇と、前回の1265篇に比べて数こそは減少しましたが、「学校の課題で」「文芸部の顧問の先生に勧められて」といった事由での投稿は前回より激減し、「学校の掲示を見て応募」や「高校生のときにしか出来ないことをしたいと思ったので」等、独立独歩型で熱のこもった応募が増え、上位層の水準はむで熱のこもった応募が増え、上位層の水準はむしろ上昇した印象を受けました。

を上げながらの選考となりました。に掬い上げた作品が数多く見られ、嬉しい悲鳴今回はその「内実」を形作る微少な差異を丁寧ような技巧を駆使した作品が目立ちましたが、ような技巧を駆使した作品が目立ちましたが、

拡大するかのようです。

拡大するかのようです。

が大するかのようです。

が大するかのようです。

が正介な感情を切り取り、その切断面を
のですが、この作品は一見日常的でありながら、
のですが、この作品でした。通常、このような設定
プローチの作品でした。通常、このような設定
が大するかのようです。

テーマとなった「あだ名」は、たった一瞬の

ですれ。 「僕」の「(意図的な)誤読」から生まれたも 「記号」です。記号は本人と等価に交換され得 「記号」です。記号は本人と等価に交換され得 「記号」です。記号は本人と等価に交換され得 「記号」です。記号は本人と等価に交換され得 したもので、「自分と等価ではない = 時に不本 したもので、「自分と等価ではない = 時に不本

本作は、極めて適正な分量で書かれている点も、高評価となりました。おそらくこれ以上足しても、引いても、本作品は成立しなかったではありませんが、私見では、作品の分量には必然性があります。その意味で、優秀作と佳作の然性があります。その意味で、優秀作と佳作の然性があります。その意味で、優秀作と佳作の然性があります。その意味で、優秀作と佳作の然性があります。その意味で、過ぎないなどの力量に差はないのでありました。

優秀賞となった村上陽香さん「タイムリミット」は、条件・否定・条件・否定・肯定・仮定……と展開する中で、条件の否定と肯定の振り幅を激しく上下させる構成になっています。昨年も優秀賞を受賞されましたが、前作中的に描いたような作品だったのに比べ、今作中的に描いたような作品だったのに比べ、今作はより言葉の選び方、組み合わせ、韻律のバランスが繊細に絡み合い、練度を増した印象です。終連を読むと、この一般的な言葉に連なる余剰かの多さを思い、終連から逆算で創作したようにも思えました。

同じく優秀賞となった内藤結月さん「立ち止同じく優秀賞となった内藤結月さん「立ち止合わせを印象的に使った作品です。高校生新聞合わせを印象的に使った作品です。高校生新聞ない「何か」を書こうとする作品は多いのですない「何か」を書こうとする作品は多いのですない「何か」を書こうとする作品は多いのですが、本作はその潔さで一頭地を抜いていました。可能利で畳みかけるような基調との対比がな事が、本作はその潔さで一頭地を抜いていました。

される表現分野だと、今回も再認しました。も自由ですが、それゆえに「捨てる勇気」が試た。現代詩は、一見音数が決まった定型詩よりな点で、それが大変に惜しい作品が目立ちまし前回同様、全般的に初連ないしは終連が冗長

▶ 水無田気流(みなした・きりう)

昭和四十五年神奈川県生まれ。早稲田大学大学院社昭和四十五年神奈川県生まれ。早稲田大学と済学 「京公司」(光文社新書、平成2年)、『「居場所」のない男、「時間」がない女』(日本経済新聞出版社、 で第49回晩翠賞受賞。また社会学者としても活動し、 で第49回晩翠賞受賞。また社会学者としても活動し、 で第49回晩翠賞受賞。また社会学者としても活動し、 で第49回晩翠賞受賞。また社会学者としても活動し、 で第49回晩翠賞受賞。また社会学者としても活動し、 で第49回晩翠賞受賞。また社会学者としても活動し、 で第4回晩翠賞受賞。また社会学者としても活動し、 で第4回晩翠賞受賞。本成十七年に『音速平和 で第4回晩翠賞受賞。本成十七年に『音速平和 で第4回晩翠賞受賞。本成2年)、『「居場所」 のない男、「時間」がない女』(日本経済新聞出版社、 マザーの貧困』(光文社新書、平成2年)、『「居場所」 のない男、「時間」がない女』(日本経済新聞出版社、 マザーの貧田、「大学と記述、 のない男、「明本2年)、『「居場所」 のない男、「日本経済新聞出版社、 のない男、「日本経済新聞出版社、 のない男、「日本経済新聞と、 のないま、 のな

鹿児島・ラ・サール高等学校 三年

そばにいてみんなを優しくしたいから半濁点に僕はなりたい

石川・北陸学院高等学校 二年

優秀賞

中川 莉果子

改札でいつも笑顔の駅員さん今日は手を引きホームに向かう

千葉県立安房高等学校 一年

彩徒

賢しげに人のあり方説く人の隣にそっと咲くレンゲ草

佳 作

埼玉県立浦和第一女子高等学校 二年

会ふたびにちさくなりゆく祖母の背に負はれし日あり母もわたしも

大阪府立堺東高等学校 二年

暑い中扇風機もなく黙々とあげてくれていた祖母の天ぷら

群馬県立太田高等学校

あててみて手持ち花火で「すき」と書くビビッてすぐに「やき」を付け足す

埼玉県立深谷商業高等学校 二年

道ゆく人皆片手にスマートフォンスマホの鎖に飼われてる 大川 柊斗

新潟·東京学館新潟高等学校 三年

栗田 岳

祖父ちゃんが漁師の経験語る時右手の団扇は舵を切ってる。

入 選

千葉県立安房高等学校

影山 仁香

ふわふわとたんぽぽ綿毛とんでいく「離れていても家族だからね」

大阪府立堺東高等学校

平和 陸斗

武器を持つそれで平和か安心か尊き命を奪ってまでも

静岡県立静岡高等学校 三年

牧野 由都菜

哲学は覚えただけじゃ人生の救済になんてなってくれない

奈良県立畝傍高等学校 三年

祐香

人前で本音を吐かぬフラミンゴもう片方の君の脚はどこ

静岡·沼津工業高等専門学校 一年

興津 諒汰

渡嘉敷の真白な砂浜青々と珊瑚の海は宝石の城

アルプスの仲間のために気持ち込め一発で応えるフルスイングで

青森県立五所川原高等学校

静岡県立掛川東高等学校 三年

引退し最後の掃除終えたあと静かな部室せみの ぬけがら

徳島県立阿波高等学校 二年

渡辺

ダル踏むコンビニもない田舎道星降る夜を独り占めして

ペ

埼玉県立川越西高等学校 三年

日傘持つ母と二人で夏祭り荒れてる指に想いを馳せる

宮城県立宮城第一高等学校

「よく来たね」言われたようで振り返るゆらゆらゆれる盆提灯

短歌の部

40

短歌 0)

歌

田 中 章義

られた短歌部門。他の誰とも違う歌、 ですが、注目作を紹介します。 品が多かったため、紙幅の許す限り、ごく一部 と向き合いました。入選歌以外にも注目した作 らこその思いや体温が感じられる歌を選出しま した。幾度も読み返し、何日もかけて一首一首 ここ数年で最も多い七千数百もの作品が寄せ 作者だか

がめる線香花火」(静岡県立掛川東高校大林夕 夏輝)、「弱いから汗水たらしボール追う必死に 君と踊るなら」(兵庫六甲アイランド高校山本 山本和実)、「柄になく花笠音頭猛練習体育祭で 大きくなったよ」 押す大夕焼」(佐賀県立鳥栖高校小島涼我)、「灼 た夏忘れない」(浦和第 尾龍浩)、「君と行く花火大会よりも好き君とた つなげる僕らのバレー」(大阪府立堺東高校松 なった」(埼玉県立浦和第一女子高校根本瑞希)、 熱の太陽の下で体育祭日焼け気にせずゴリラに 「線香の香りが父を呼んでいる私もこんなに 「颯爽と翔く鳥を見ていると飛ぶ方向に夕日が 「段々と君との歩幅合っていく二人の背中を 「愛情の花言葉もつアサガオを大事に育て (沖縄昭和薬科大学付属高校 一女子高校川島千佳)、

> 空が一人ぼっちのひとはいない」 えられる導く鍵は我が身にあり」(宮城第一高 られてああ父さんが帰ってきたかな」(浦和第 校大宮優莉菜)、「いつだって見上げて見れば大 天下暑いと騒ぐ人々と無言で耐える道端の花 まる」(東京昭和女子大付属高校昆あかり)、「炎 に浮かぶ氷が肩寄せて溶けあうように夏がはじ コンクールに向け日々鍛錬一音入魂一 える」(東京関東第一高校下村知遥)、 てる景色は変わらない踏み出す一歩が世界を変 したい」(安房高校石井周治)、「動かなきゃ見 誰かのために一人よりみんなのためになにかを か」(宮城常盤木学園岩佐真帆)、 日 見える」(千葉県立安房高校平川陽輝)、「あの 一女子高校犬山千菜歩)、「人生は自分次第で変 (安房高校月原拓海)、「盆の夜風に髪の毛なで (埼玉県立深谷商業高校大島朋実)、 (埼玉県立川越西高校沼田茉理愛)、「自分より 顔が歪んでる灯りに照らされ嬉し恥ずかし_ から八年経った今の自分変化したのは街か心 (川越西高校 「金魚鉢二人 「サイダー 期 「吹奏楽 一音

> > りて血よ滾れ魂燃ゆる短夜なり」(青森県立 井県立丸岡高校小林陸人)、「立佞武多姦しくな 校中村優梨奈)。 校内藤沙那)、「終戦とともに生まれし祖母の手 なら他の誰かの声が重なる」(山口野田学園高 所川原高校加納唯楓)、 よ携帯いじる長弟よこの美しき夜桜を見よ」(福 に重なる月日思いをはせる」(浦和第一女子高 「合唱部誰かが鼻歌歌う

ます。 全国からすばらしい作品をありがとうござい

田中 章義(たなか あきよし

けている 執筆。BEGINなどミュージシャンの歌詞も手掛 や北島康介選手の社会貢献活動を紹介した単行本も 物ルポルタージュなどの著述もあり、 ジェクト」推進委員長、ワールドユースピースサ 国連環境計画・地球環境平和財団 13年国連WAFUNIF親善大使に就任。JICA など多数執筆。世界で詠んだ短歌が英訳され、平成 世界を旅しながら、ルポルタージュ、紀行文、絵本 受賞。以後、「地球版・奥の細道」づくりをめざし 「21世紀のボランティア事業を考える会」検討委員、 策学部卒業。大学一年生のとき第3回角川短歌賞を 昭和四十五年静岡県生まれ。慶應義塾大学総合政 短歌集の他、 「地球の森プロ 松井秀喜選手 絵本や人

けない」(浦和第一女子高校金子莉奈)、「長弟

て明日の私そうじゃない今の私がやらなきゃい 桜今も忘れず」(安房高校西川綾佳)、「頑張っ せずに前を向こうか」(徳島文理高校佐藤航士 歩)、「階段を二段とばしでかけ上がるくよくよ めたい耳を撫でる静寂」(愛媛愛光高校豊富瑞 太田百歌)、「ブランコを漕げば夜空が傾いてつ

「またおいで恩師に言われ涙したあの日の

岩手県立水沢高等学校

鈴木 萌晏

割り箸にごはん一粒春の山

優秀賞

水鉄砲撃てよ友達に戻らう

埼玉・星野高等学校

二年

立ち向かうそう思う日の暑さかな

野城 知里

蝉しぐれ父の呼ぶ声こだまする

川口 るみ

わたしこの本に棲む紙魚にならなる

福岡県立明善高等学校

留守番の庭の明るし芋虫這ふ

原田 駿

蟻の道曲がりながらも整然と 三重・三重高等学校 髙濵

<u>飒</u> 二 太 年

佳

作

岐阜県立吉城高等学校

一年

水﨑

ゆず

白粉花流星のごと手を洗う

千葉県立安房高等学校 年

森山 和花

東京・淑徳巣鴨高等学校 一年

酒井 るり子

愛知・名古屋高等学校 三年

九州男児むんずとかぶと虫攫ひ

井上 昂星 東京・立教池袋高等学校

静岡県立浜松南高等学校

中田 久善

葬送の列の後から五月闇

剽軽なラジオネームや晩夏光

群馬県立太田高等学校

藤田

華綺 二年

海霧や銀濁りたる臍ピアス

愛知県立幸田高等学校

三年 夢

木村

埼玉県立浦和第一女子高等学校

春杏

河端

向日葵や見渡す限り皆主役

祖父の家おやつはトマトでありにけり

山口県立熊毛南高等学校

一年

岡村

音乃

北海道・旭川龍谷高等学校 二年

髙田

麻由

年の暮れ消しゴムも小さくなった

秋曇窓に張りつく求人票

青森県立七戸高等学校

二年

川村

海斗

それでもと進む轍や若楓

千葉県立幕張総合高等学校

花澤

希海

俳句の部選評

俳人

堀本 裕樹

との出会いを嬉しく思っています。ていただきましたが、多感な皆さんの新鮮な句た。今回で三回目の俳句部門の選者を担当させしてくださった皆さん、ありがとうございまししてくださった皆さん、ありがとうございまし

いい句を作ってやろうという企みや力みがなず惹かれました。どこにも力が入っていない。の山」で春。この句の持つ自然体の雰囲気にまの山」で春。この句の持つ自然体の雰囲気にまでは、入選を果たした句を観ていきます。

を 本の山を眺めながらお弁当でも食べていたの を でしょう。非常にのどかな光景です。そして食 でしょう。非常にのどかな光景です。そして食 でしょう。非常にのどかな光景です。そして食 には、山が笑っています。「山笑ふ」も春の季 には、山が笑っています。「山笑ふ」も春の季 には、山が笑っています。「山笑ふ」も春の季 には、山が笑っています。「山です。 この句 とまるで人間のようにたとえたのです。 とまるで人間のようにたとえたのです。 さな米粒に笑いかけているようです。そこには

んわり感じられます。

平和にごはんを食べられる感謝の気持ちさえじ

まく効かせた、ほんわかでいて卓抜な一句。「ごはん一粒」と「春の山」との遠近法もう

水鉄砲撃てよ友達に戻らう

優秀賞の野城知里さんの作品。季語は「水鉄砲」で夏。喧嘩をしている友達との水遊びの場をしているのですが、そのなかの一人との仲がうまくいっていない。でも、もうそろそろ仲直りしたいのです。それはお互いの雰囲気で伝わってきます。その水鉄砲で遠慮なく自分をわってきます。その水鉄砲で遠慮なく自分を撃ってくれたら、こちらも笑って打ち返せるのに。水鉄砲を無邪気に撃ち合える仲に早く戻りたい。「撃てよ」という呼びかけが作者の気持ちを代弁するとともに、青春の友人関係の一コマを輝かせています。

わたしこの本に棲む紙魚にならなる

優秀賞の川口るみさんの作品。季語は「紙魚」で夏。「この本」とはどんな本でしょうか。小で夏。「この本」が大好きなのです。だから本にかく「この本」が大好きなのです。だから本にする宣言を一句に仕立て上げたところに惹かれました。思春期にそんな本に出会えたことは「紙魚」の宝物になるでしょう。

佳作の水崎さんの句は、「流星のごと手を洗 う」が新鮮。迸る水と手の動きがよく見えます。 森山さんの句は、何かに立ち向かっていく志が なってきました。暑さもはねのける気持ちの 強さ。酒井さんの句からは父の温かい声が聞こ えてきます。同時に父を慕い、父に会いたい思 いが「こだま」に溢れます。原田さんの句は、蟻 留守番のゆったり流れる時間を「芋虫這ふ」の はまでうまく捉えました。高濱さんの句は、蟻 をよく見つめて詠んでいます。句作りはじっく をよく見つめて詠んでいます。相した成果です。

● 堀本 裕樹(ほりもと・ゆうき)

第23回 全国高校生「創作コンテスト」受賞者一覧

短篇小説の部				
優秀賞	登 裕太郎	東京・文化学園大学杉並高等学校		
優秀賞	柏倉美彩子	東京・東京純心女子高等学校	2年	
佳 作	比江島 凜	宮崎県立宮崎東高等学校	3年	
佳 作	吉田 恵	福岡県立筑紫丘高等学校	1年	
佳 作	瀧口 夏鈴	東京・安田学園高等学校	2年	
佳 作	水田里緒菜	神奈川県立横須賀高等学校	2年	
佳 作	溝上 大翔	東京・巣鴨高等学校	1年	
入 選	長谷川向日葵	宮崎県立宮崎西高等学校	2年	
入 選	檍 里佳子	兵庫県立長田高等学校	2年	
入 選	本田 雄璃	兵庫県立長田高等学校	2年	
入 選	緒方 杏里	福岡·筑紫女学園高等学校	3年	
入 選	佐藤 舞佳	静岡・沼津工業高等専門学校	1年	

※各賞内の並びは応募受付順

現代詩の部				
最優秀賞 吉田 眞子		兵庫・神戸大学附属中等教育学校	4年	
優秀賞	村上 陽香	北海道・立命館慶祥高等学校	2年	
優秀賞	内藤 結月	埼玉・淑徳与野高等学校	2年	
佳 作	小板橋彩花	群馬・高崎商科大学附属高等学校	1年	
佳 作	安田 武流	神奈川県立麻生高等学校	2年	
佳 作	浜口 すず	東京都立日比谷高等学校	1年	
佳 作	本領 里緒	東京・田園調布雙葉高等学校	2年	
佳 作	川上 紗和	岡山・岡山学芸館高等学校	2年	
入 選	川口 るみ	福岡県立明善高等学校	2年	
入 選	菊地 愛佳	東京・女子学院高等学校	2年	
入 選	島川 亜弓	沖縄·N高等学校 沖縄伊計本校	3年	
入 選	関口 凌真	埼玉県立春日部東高等学校	2年	
入 選	小俣 卓紀	東京・桐朋高等学校	1年	
入 選	牛島 伸陽	福岡県立明善高等学校	2年	
入 選	栫 伸太郎	鹿児島・ラ・サール高等学校	3年	
入 選	牧野かれん	東京・国際基督教大学高等学校	2年	
入 選	伊藤 寛子	千葉・渋谷教育学園幕張高等学校	2年	
入 選	梶原 翠	埼玉県立浦和第一女子高等学校	3年	

短歌の部				
最優	秀賞	德森 大悟	鹿児島・ラ・サール高等学校	3年
優秀	賞	中川莉果子	石川·北陸学院高等学校	2年
優秀	賞	松井 彩徒	千葉県立安房高等学校	1年
佳	作	林 優授子	埼玉県立浦和第一女子高等学校	2年
佳	作	赤松 彩葉	大阪府立堺東高等学校	2年
佳	作	川島 颯太	群馬県立太田高等学校	2年
佳	作	大川 柊斗	埼玉県立深谷商業高等学校	2年
佳	作	栗田 岳	新潟·東京学館新潟高等学校	3年
入	選	影山 仁香	千葉県立安房高等学校	1年
入	選	平和 陸斗	大阪府立堺東高等学校	2年
入	選	牧野由都菜	静岡県立静岡高等学校	3年
入	選	下田 祐香	奈良県立畝傍高等学校	3年
入	選	興津 諒汰	静岡·沼津工業高等専門学校	1年
入	選	鈴木 琴	埼玉県立川越西高等学校	3年
入	選	堀部 愛華	宮城県宮城第一高等学校	1年
入	選	今 駿翔	青森県立五所川原高等学校	2年
入	選	平野 大夢	静岡県立掛川東高等学校	3年
入	選	渡辺 あみ	徳島県立阿波高等学校	2年

俳句の部				
最優秀賞	鈴木	萌晏	岩手県立水沢高等学校	2年
優秀賞	野城	知里	埼玉・星野高等学校	2年
優秀賞	川口	るみ	福岡県立明善高等学校	2年
佳 作	水﨑	ゆず	岐阜県立吉城高等学校	1年
佳 作	森山	和花	千葉県立安房高等学校	1年
佳 作	酒井	るり子	東京・淑徳巣鴨高等学校	1年
佳 作	原田	駿	愛知・名古屋高等学校	3年
佳 作	髙濵	颯太	三重・三重高等学校	2年
入選	井上	昂星	東京・立教池袋高等学校	3年
入選	中田	久善	静岡県立浜松南高等学校	1年
入選	岡村	音乃	山口県立熊毛南高等学校	1年
入選	川村	海斗	青森県立七戸高等学校	2年
入選	花澤	希海	千葉県立幕張総合高等学校	3年
入選	藤田	華綺	群馬県立太田高等学校	2年
入選	木村	夢	愛知県立幸田高等学校	3年
入選	河端	春杏	埼玉県立浦和第一女子高等学校	1年
入選	髙田	麻由	北海道·旭川龍谷高等学校	2年

文部科学大臣賞		千葉県立安房高等学校
	特別学校賞	福岡県立明善高等学校
	特別学校賞	兵庫県立長田高等学校

※各賞内の並びは応募受付順

第23回 全国高校生「創作コンテスト」応募総数

■応募数

	応募高校数	応募人数	作品数
短篇小説	171	607	669
現代詩	136	655	852
短 歌	169	3,198	7,726
俳 句	155	4,585	10,605
合 計	(延べ) 631	(延べ) 9,045	19,852

[※]部門間重複参加校あり

■応募高校数内訳(都道府県別) 4部門合計

一心务问及数门队	(和地内,不为)	161 1 TI E1	
都道府県	応募校数	都道府県	応募校数
北 海 道	8	滋賀県	0
青 森 県	3	京都府	7
岩 手 県	1	大 阪 府	12
宮 城 県	3	兵 庫 県	12
秋 田 県	1	奈 良 県	3
山 形 県	2	和歌山県	0
福島県	9	鳥 取 県	0
東京都	75	島根県	0
神奈川県	39	岡 山 県	6
千 葉 県	20	広 島 県	4
埼 玉 県	31	山口県	3
茨 城 県	11	徳 島 県	6
栃 木 県	5	香 川 県	1
群馬県	13	愛 媛 県	3
山 梨 県	5	高 知 県	0
静岡県	12	福岡県	14
新 潟 県	5	佐 賀 県	4
長 野 県	6	長 崎 県	1
富山県	1	熊 本 県	3
石 川 県	2	大 分 県	4
福井県	2	宮崎県	3
岐 阜 県	4	鹿児島県	4
愛 知 県	17	沖 縄 県	7
三 重 県	6	海外	1
	合 計	379校	